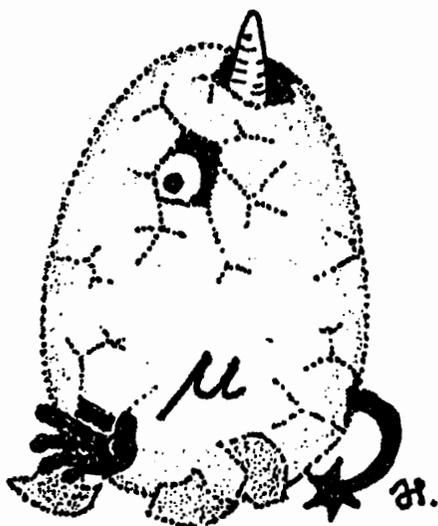


# 日本生物學會誌

第 25 号



日本生物學會

1988年 1月15日



猿 学 万 歳 (2)

水 原 洋 城

学者：その後 どないや。うち見たところ けっこうのん気そうやな。毛のつやもええし。

猿 ああ、気楽にさしてもろてまっさ。行雲流水の境涯もなかなかええもんや。

学 群れに入る前にひとり暮らしてたところと同じか。

猿 あの時、もっと若うて経験も豊かとはいえんかったが、気楽さはそう変らん。自分からいうのもおかしいけど、今回は度胸もついたし、ひとりで居って 周りの物音にやたら緊張することもない。さびしいと思わん。

学 群れの中で威張りかえってるのと比べて、とくに不便も感じんか。

猿 強いていうなら、毛づくろいしてくれる奴がおらんさかい、手がとどかんとところの毛皮の手入れが若干不足になって、それが不便ちゅうたら不便やけど、そんなことは大したことない。考えてみいや、食うもん変らん、着るもんも御覽の通りで着たきりすずめやし、食う手間もいっしょや。自分でとって食うんやし、自分の足で歩きまわれる範囲のもんを探して食うだけのこっちゃ。つまり消費生活水準は、向上も低下もせん。むしろいらん気使わんだけまし、といえるかも知らん。他の奴に向って威張るちゅうのも悪くないけど、それが何ほのもんじゃ てな気持や。

学 退屈はせんか。

猿 これは近ごろ 異なことを承るなあ。わしらはもともと退屈に強いねん。

学 何となく孤高の感じも出てるな。これはほめ過ぎか。

猿 それはお前らの感情移入ちゅうもんや。孤高も衆愚もあらへんがな。それで今日は何ぞ話でもあるんか。

学 うむ、ちょっとこないだうちから 気になってることがあってな。いろいろ本読んだりノートめくったり考えてみてるんやが……。

猿 下手の考え休むに似たり ちゅうことばもあつたな。

学 茶々入れるな。実はな、お前らサルは、いったい自分自身のことを どれくらいわかってるんやろかなあ、ていうことなんやけど、そのへんのとこを、ちょっと聞きたいねん。

猿 またえらいこと思いついてくれたもんやなあ。いや、別にかまへん。かまへんけど その話するんやったら、する前にちょっとことわつかなあかんことがあるな。

学 何のことや？

猿 わし、こないして お前と人間のことばで問答してるやろ。このこと自体が、まあいうたら

矛盾やわな。そこへさいて、もしこのままの調子でわしらが人間の考えやサルの了解をあれこれ評（あけつる）うて行ったら、聞いてはる人は、完全に困乱してまうわ。そやから、わしとお前との人語対話が何で成立してるか、そのわけを説明しとく必要があるねん。

学 そのわけというと？

猿 それはな、わしが“術”使うて“言霊（ことだま）”の力を借りてるからやねん。

学 “術”？ “言霊”？

猿 そや。ふつうのサルであるわしがやな、ニホンサルの進化史の過程で、自然から与えられたちゅうか、要するに身に具わった知的能力や発声能力の範囲内にとどまってるかぎり、お前から直接話すことは不可能や。それを、“言霊”の力を借りることで不可能を可能にして、お前らのレウ”エルに合わせて話をしてるのや、ちゅうことを承知しといてもらわんならん。これはこの前からの話にしてもそうやが、とくにこれから、事が自己の認識の問題に関わる話になってきたら、なおさらこの前提をよう頭に入れてといてもらう必要が出て来る。ええか、つまり、わしとお前との対話の成立は、いわば S F の約束ごとやねん。その中に出て来よるおれ以外のサル一般及びおれが相対化して表現するおれ自身には、“言霊”はついたあらへんねん。話者としてのおれだけが、ルビコンを越えた“言霊”つきのスーパー・モンキーちゅうことになってんねん。これ忘れたら混乱するで。ええか、S F やで。

学 何やもう混乱してきたがな。ええと、話者としてのお前にだけ“言霊”がついてるねんな。その他は、一切合財 ただのサル。よっしゃわかった。わしも S F 好きやから心配すな。

猿 そうか、わかってくれて安心した。わしはお前の書くもん見てて、お前は U N 一点張りの方かと思て ちょっと心配してたけど そらよかった。

学 何や その“U N”て？

猿 聞えたか。いや その、U N ちゅうのはな、アンサイエンティフィック・ノンフィクションの略や。

学 こら、人おちょくるのもええかげんにせんか。どつかれるぞ、しまいに。

猿 あはは、悪い悪い。冗談やがな。こらえてくれ。

学 ほんまに 小憎たらしいサルやな。そやけど、お前、その“言霊”たらしい、しゃれた物の化（け）に一体いつ取りつかれたんじゃ。

猿 これは極秘事項ゆえ、構えて他言は無用心やぞよ。

学 おい、気色の悪い声出すな。

猿 あの名、わし、若い時に ふもとの寺の禅堂に通うて、窓の下の廊下で 老師のまねして座禅してたことあるねん。その時にカツ然大悟、宇宙の真理を会得してな、それから身についたもんや。

学 何や仏教と神道とごちゃませにしたみたいな怪しげな話やけど まあそうしといたるわ。とにかくお前と話するには便利なことやからな。

猿 人にいうでないぞよ。

学 だれがいうかい。いうたらこっちが間違い扱いされるだけじゃ。しかし何やな。こんなこと信じたら、科学者として少々うしろめたいような気もするな。

猿 何をえらそうに。サルの上簡もわからいで何が科学じゃ。お前がうしろめたいと思わんならんのは、わしのお話をさも自分で調べたことのように発表して点数かせぐ時やろ。何でもええさかい、さっさと聞け。

学 この前聞いたお前の話の中でな、“生まれながらにして身に具わった行動傾向の一つに、他の者に関わり合おうとする性質がある” ちゅうのがあったな。あれや。

猿 あれかいな。あれはつまり、生まれてまだひと月やふた月のあかんぼが、お母はんから離れてよたよた歩いてて、おなじくらのあかんぼに出合うたら、早速近づいてさわろうとする、その行動のこというてるねん。

学 なるほど、あれは、相手に触ったり、においかいだりなめたりかんだり、つかまったり、押したり、引っ張ったり、して、相手を調べまくるちゅう行動やったな。ひと言ていうたら、ものを調べる行動や。調べるちゅうことが関わり合おうとする行動になるのか。

猿 そうやがな。あのな、しらべる行動いうのはな。よちよち歩きをあかんぼが、身のまわりのもの、何でもかんでも、石ころでござれ木の枝でござれ みみずもありん子もちょうちよも花も 片っ端から、口先を近づけてにおいをかぎ、なめ、物によったら口の中にも入れて、そら熱心にしらべるやろ、つまり環境ちゅうもんをしらべてんねん。環境をしらべることは、環境に積極的に関わろうとすることやな。ということは、同時に自分自身を環境の中に押し込んで行く、ということでもある。そこに主体とその環境との関係を、主体的にかたちづくろうとする態度が現れてる、とわしは思うねん。それを他のあかんぼに及ぼ そうちゅうのが、仲間関係の形成のはしりや。これが、同じしらべる行動でも 物相手の場合と違うのは、相手もまた主体やちゅうとこや。相手もこっちをしらべようとして同じ行動を返してよこす。相互に関り合おうとしてるわけやな。両方ともが、自分自身を、今度は社会的環境の中へと積極的に押しこんで行こうとしてる態度の現れや。これがもっと大きゅうなってやな、あそび仲間関係がはっきりして来るようになると、もう自分らで社会関係をつくって維持するちゅう、集団生活の基本を实践、体得したことになる。あかんぼながら なんとえらいもんやないかいな。どんな子でも、放っといても、自然にこんだけのことを やらかしてまうねんで。またそれだけの潜在的能力をもって生まれて来よるちゅうのも、考えてみたら不思議みないなもんや。ようできたあるて思わんか。え、どうや。

学 そないにいきらんかてええやろ。なるほど、いわれてみたらそうやな。そやけど、あかんぼが生まれて最初に出合うのは、そいつのお母はんやろ。

猿 当たり前やがな。それがどないしたんや。

学 それやったら 社会的関係は、先ず最初に親子関係として成立するねんがな。それが、他の関係に転化し拡大されて行くと考えるのが自然やないか。

猿 それこそやないねん。母子関係があかんほにとって大切なのは、きまったこっちゃ。そやけど、この関係は、あかんほから働きかけた結果やない。あかんほは、しがみついて乳飲む他は、母親に対して全面的に受け身や。それに、空気呼吸以外は、生存そのものをお母はん頼ってるわ。いうたら腹の中に居った時と本質的に変らん関係や。引き離したら血が出るような結びつきや。しかもこういう母子の関係はやな、わしらみたいに常時集団生活してえへん動物の場合も同じや。そやから、母子の関係は、集団内の、それ以外の社会的諸関係に比べたら、きわめて特殊な関係として、ちょっと横においとからならんもんやねん。混同したらあかん。あかんほが、お母はん以外のサルと積極的に関り合いをもつようになるちゅう過程は、母子関係の延長上や無うて、お母はんからの独立の過程——徐々にやけどな——で進むもんや。

学 なるほど、さよか。母子関係の特殊性はわかったけど、もう一つ、あかんほがあかんほに出会う他に、あるいは前に、あかんほやない他の年長のサルと出くわすこともあるやろ。その方はどないなるねん。それも新しい関係とちゃうか。

猿 そらもちろん、そういう場合かて何ほでもある。それを軽視せえとはいわん。けどわしが何で、あかんほ対あかんほの出合いの話から始めるかいうたらな、それは、あかんほが社会的経験をほとんど持たん状態で他のあかんほに合う、ちゅうのが関り合いの出発点として典型的やからや。お互いにタブラ・ラサや。白紙や。虚心や。お互いに相手をしらべ合うやろ。“お前は一体だれやねん”“お前こそ何や”とは口に出してはいわんけど、いわん許りにやる。ここはすでに“我と汝”の関係が出てるねん。物相手の場合と違って“自己主張のぶっつけ合いを通じて相手を知り、その関係において自分自身をも知る”過程が成立するわけや。主体の自己確証が相互確証にもつながるわけや。この過程が“我と汝”双方において同時に起こるさかいに、社会的存在としての自己の認知の問題を考えるのやったら、やっぱり社会化過程の始まりの典型として、あかんほ同士の出合いを論議の基本に持って来るのが、いちばんええねん。これが他の年長のサルやったらどうなるか。ちょっと大きい子やったら、もう、あかんほをケアの対象として扱うでしまいよる。つまり自分が保護者であるようなふるまいを示すさかい、あかんほの方からの働きかけは、母親に対するのと基本的に変らん、さっきいうた親子関係の延長上に位置づけられることにもなって、あんまりおあつらえ向きの例にならんことが多いねん。

学 自分が集団の中で何者であるか、を知る過程の基本は、どれくらいで完了するもんやろ。

猿 セックスに関わることを別にしたら、あかんほといわれてる期間、生後一年で、だいたい主なところは“わかる”のやないかなあ。

学 一年いうたら、だいたい自分の足で群れの移動に、どうぞこうぞついで行けるようになるころやな。そない早うわかるもんかいな。

猿 結構やりよるで。こないだも見てたら、ちょうど一歳くらいのおスのちびが、六～七歳の若い衆に、尻つき出してプレゼンティングしてよったで。大きなサルに出会うて恐かってんやろけ

ど、がまんして、逃げんとプレゼンティングしよったんで感心した。

学 停止敬礼やな。それでその若い衆の方はどないしたんや。

猿 そらもう無視やがな。そのまま横目でちらっと見て通過や。ひょっとしたらそいつも心の中で感心しよったかも知れん。

学 そんなしぐさも、仲間と遊びもっておほえるねんやろな。

猿 そうやと思う。わしの子供の時分もよう憶えてるわけやないけどそうやった、と思う。それを世間に応用しよってんやろ。

学 あいつらが、あそび仲間の同年齢集団つくってあそびまくってる間に、どれくらい行動面での発達が見られるやろか。もちろん身体的・情緒的な成長発達と平行さしての話やけどな。

猿 見てると仲々おもしろいで。始めは、さっきいうた通り、しらべることぐらいて、すぐ別れよる。この時期はまだ遊ぶちゅうとこまでは程遠い。第一満足に走りも跳べもてけへんねんさかいな。それでも、関り合おうとする傾向と並んで出て来る、もう一つの“ついて行こう”ちゅう傾向な、これがお前、一か月もたたんうちに、ちゃんと出て来よる。側を通り過ぎるちょっと早う生まれたあかんぼやら一年上の子供やらに、ぱっと反応して、よたよたとかえる跳びの混った足どりで、つられるようにしてついて行こうとする。こらもう生まれつきともか思えん。えらいもんや。

学 これも ちょっと念のために聞くけど、母親について行くのとはまた様子が違うんか。

猿 これも関り合いの時に説明したんと似たような理由で、お母はんへの追隨とは別や。お母はんにつきしたがうのは、もしくはあと追いつくのは、お母はんのところへ行きよんねん。お母はんが目標でゴールや。追いついたら抱いてもらたり、おんぶしてもらたりして一件落着や。“帰る”というたらええかな。それに対して、仲間について行こちゅうのんは、お母はんの傍から離れて“出かける”ことになるねん。それと、これにはゴールは無うてもええねん。もうちょっと大きゅうなったら活発に遊びよるさかい、その遊びが目標になるし、無理していうたら“遊びの場”がゴールやともいえんこともないが、生後一か月くらいやったらそれもいえん。これは、“関り合おう”が、遊びのためやといえんのと同断や。

学 そうか。それならいっそ“ついて行こう”も、“関り合おう”の範ちゅうに入れてもたら、もっと簡単にええのと違うか。

猿 そらちょっとせん方がええて。というよりもやな、わしは仲間関係を自発的積極的に形成し維持する、ということに直接関る、最も基本的事得的な行動傾向、として二つの行動傾向を抽出したんやさかいに、その二つをどうにも一つにせないかん理由はない。それから一ついこうとな、“関り合おう”は、“しらべる”行動、“ついて行こう”は、そのまま“ついて行く”行動をそれぞれ媒介にして規定したんや。媒介とする具体的な行動パターンを根拠とせえへんような、単なる抽象化過程の概念のカテゴリー操作やったら、お前のいうことも、取り

上げられんもんでもないけど、わしのいうてんのは、あくまでも行動上の根拠に基いた理論化の話やから、その異論はちょっと採択し兼ねるな。ここで前の話にもどらじてもらうけど、そのころいうたら、まだよう遊ばん、ひとり遊びもあやしい時分やし、情緒そのものも、未分化というか、はっきりせんというか、要するに頼りないもんやな。そもそもお母はんは手と足でしがみついて、乳飲む、眠るだけのころは、はうだけで歩きもでけへん。情緒は恐らく快不快を辛うじて弁ずるのみ、てなとこか。もとより、情緒自体は判らんから、表出を頼りにするわけやが、これが欲求不満の音声と表情だけや。平静な表情も、もちろんあるけど、これもいうたら“不満でない”ちゅう程度のもんで、とても他の者に見せようなんて、しゃれたしろものやない。すべてが未分化な状態から、互いに連携しつつ平行して進みもって次第に分化して行く。

学 わしらが ふつういうてる、ひとり遊びは、お前のいうどの段階になるねん。

猿 お前らのいわゆるひとり遊びは、“関り合おう”と“ついて行こう”の傾向が出て、少しは木に登れもする、走れもする、ぐらいのとこかな。遊ぶというても、自分で自分の体をかなの思い通りに動かせる、操れる、そしてそのことがわれながら楽しい、みたいに見えるような運動が主や。ここで、おもしろいのは、自分だけでできる、体操めいた遊びをするのに、あかんほどうし集まりたがることや。このことは、わしらがもともと何かするために集まるんや無うて、何かをするせんの問題以前にというか、それとは独立に、集まろうとする性質をもってるちゅうとこがよう出てると思わんか。わしらもあかんほやら見てて、ぞない患うようになってん。

学 このへんでは、けんがやらはまた起きんみたいやな。

猿 そうそう、やかましゅういうたら、衝突はあっても、けんかのしかたがようわからいで行き違う。うまいことけんかの流れができん、でことになるかな。これも情緒の分化発達過程と平行しててな、怒りの情動が、相手が自分に与えた苦痛——悲鳴をあげ、怖れの表情を示す——と結びついてたかまり、相手に対する威嚇の表出——音声や表情——となって現われる、というふうに出たらええねんけど、必ずしもうまいこと結びつかん。腹は立つらしいねんけど、相手をうまいこと威嚇できなんだり、した積りでも相手が無自覚で、きょんとしたりすると、せっかくの威嚇も、相手への攻撃行動にも展開せず、相手を恐れ入らすこともできん。やり場がないままに引っ込んでしまう、てなことが、これくらいのころには、ようある。けんかに比べたら、ただとっくみ合うたり、追いかけて合うたりしてる方が簡単で、実際そういう遊びの方が、けんかより先に見られる。それでも、遊びは遊びで、各行動の協同、連携、誘発、抑制も可能になり、それにその中で起きたけんかの仲直りなんかが入りこんで来たら、そこではそれなりの複雑な表出のつながりや組み合わせの変化を扱わんならんから、遊びは、けんかができるようになった後も、その内容はどんどん多様化、複雑化して行く。

学 遊びがそない複雑か。行動のパターンは要するにとっくみ合いと追いかけて合いだけやないか。あ

とはこれらの若干の変型で、しまいやろ。

猿 そらお前のいう通りや。けどな、そやから複雑多様になるのは内容やていうてるやろ。

学 その内容は行動とちゃうのか。

猿 行動は行動やけど、いわゆる遊びの行動パタンのことやないねん。わしのいうてるのは、さっきからいうてるように、遊びの中の社会的伝達に関わる諸行動のことや。

学 さっきからいうてる、ちゅうと、表出のつながりや組み合わせの変化やとか、行動の誘発や抑制やいうてたあのことか。

猿 そのことやがな。伝達、つまりコミュニケーションの内容や。社会的経験を、あかんぼなりに積んでやな、自分のことも相手のことも、さらには自分と相手と相互の関係のことも、少しづつはわかるようになった稚いサルが、遊びに相手を誘うのに、攻撃的なそぶりをしてわざと怒らせる、第三者を味方につけて相手をやっつける、相手があんまり恐がったら自分の攻撃的態度を控える、まわりの仲間の協調的共感を呼ぼうとして、だれぞを共通の標的に仕立てようと努める。これ結構複雑なことやで。おとなの世界でも しょっちゅうあることや。もちろんおとなは、遊びでも冗談でもあらへんけどな。そういうつき合いのごくごく基本は、なんと、生後一年以内ちゅう早い時期に、何とか身につきかかってるねん。これまたえらいもんやと思うて。しかもこれが、お母はんからの独立の過程がまだ十分進まん —— 離乳以前 —— から始まってねんさかいなあ。

学 そのコミュニケーションの話やけどな、わしら、ふつうは、コミュニケーションいうたら伝達のことをいうわな。社会的伝達いうてソシアルをつけることもあるけど、考えてみたら社会的でない伝達でないわな。そらまあええとして、それも伝達行動という特有の行動を媒介として情報の授受が行われ、相互間に意志が疎通する、ちゅうことをいうわな。ところがお前の話やと、さいせんの、主体の自己確証が相互確証につながるてなことと、“関り合おう”と“ついて行こう”の二大生得的行動傾向が集団の形成および維持のもとやていうこととが結びついて我と汝の関係が成立してること自体が伝達の基本やと。それでまたそれが、複雑な意志疎通を可能にしてる、ちゅうことになってる。そうするとやで、お前のいう伝達は、何も特定の、いうたら伝達用に特殊化し限定された意味内容をもつ記号的行動を示し合うことで成り立つんや無うて、どないな行動のやりとりがあろうとなかろうと、相互に相手の意志を読み得る関係が成立していること、そのことを指してることにならへんか。

猿 その通りや。そういう個体間関係の存在そのものが、まさに伝達装置そのものやねん。わしはサルに伝達システムちゅうことば使うのきらいやねんけど、システム好きの人間のいうシステムかて、その個体間関係に相当するもんや。ただ違うのは、システム屋がシステムを動物の体の外においてることを、わしらは動物の体を離れてそんなもんあらへんていうてることや。

学 相互に相手の意志を読み得る、と、さいせんいうたけど、情報の授受がかなり意識的に行なわれたとした場合、授受のどっちが重要やねん。どっちも大切ちゅうな返事はあかんて。

猿 そらもう受け手の方にきまってるやないか。受け手の“読む”能力、これのおかげでサルの複雑な伝達が成り立ってるねん。サルの知能は専らこの“読む”方に使われてんねがな。

学 とすると、送り手の方の複雑微妙な伝達にかかわる行動、—— 音声、表情、身ぶり、動作—— やらの方とはどないなるねん。

猿 別にどないもならん。そもそもやな、こういう“表出”は、ひと口でいうと“内的心的過程の外的表示”や、平とういうたら、“わしは、いま、こないな気分ていてまんねんで”いうてるようなもん、ちゅうか、いうてるだけやねん。この前、わしの「木ゆすり」と「のし歩き」のとこと、<<クワン>>のとこと、“仲裁と懲らしめ”のとことで、ちょっとつつ説明しといた通りや。

学 それはおほえてるけど、それでも、何ほ気分やいうたかて、送り手の方にも、それなりの複雑な思いもあるやろし、出し方にもある程度の意図性ちゅうもんがあるやろがな。

猿 ないとはいわん。むしろ大ありという方がええやろな。そやけどな、複雑さも意図性も、それはあくまで“気分”の表出の範囲内での話や。それを越えるのは、発声言語のルビコンを越える時や。“言霊”についてもらわなんたらどもならんこっちゃ。そやから、わしらは“読む”方に頭使てるてさっきからいうてるやろ。お前らは、そのへんの理屈ちよっともわからんと、複雑な伝達がありそうや、いうたら、すぐに一々の表情や声や手ぶりに大層な意味をひっつけて解釈して、システムの暗号ときごっこしようとしたがる。そやなかったら、逆に、何や“気分”だけかいな、やっぱりサルはあほうやったんや、あほやさかいことばがないねん、てな調子で短絡するだけや。ほんまにどっちがあほじゃていたなるで。

学 装置の話から機能の話へと来たところで、さいせんの“我と女”の関係やけどな、それは、当然、その延長上に二者間だけや無うて第三者の個別認知もあることになってるねんやろな。

猿 そうそう、それがなかったら、けんかも満足にでけんわな。

学 こういう関係の認知は、基本的に大事やし、それ自体かなり高度の知的能力を必要とするやろけど、このことと、自己というものをどの程度“知って”いるか、ちゅうこととは、話が別やろ。いうたら、自己客観視に必要な知的能力やさかいな。しかも、これは、自己主張をてこにして自分を社会の中へ押し出して行く際に、“環境の主体化”の過程と同時に進行する“主体の客体化”つまり自分が相手にとっては相手やちゅうことを認知経験する過程とも大いに関連するわな。そこで、この自己客観視の能力が、お前らの仲間にとどれくらいあるかも知りたいねん。もっとも、この問題は、野外の行動観察だけでは無理で、室内実験が要るわな。それに、その実験にしてからが、必ずしも、今いうたことにおあつらえ向きのもんは、あんまりない。強いて比較的關係あってわかりやすいもん探すと、動物に鏡見せる、いわゆる鏡像認知の実験ちゅうのがある。自己客観視そのものの検証になるかどうか知らんが、その手がかりにはなるやろいうて心理学者がやってる。

猿 鏡像認知か。なるほど。しかし、そんなもんやったら、こどもらが水たまりで水鏡して、よう遊んでるで。ぱっと手で水面はたいで、また波が静まったらのぞきこむ。

学 それではあかんのじゃ。イソップの犬と区別がつかんやないか。

猿 そうか。しかしやな、犬でも猫でもやで、鏡見て、慣れんうちは、その裏のぞいたり手をまわして探ったりしよるけど、そのうち知らん顔でその前通り過ぎるようになるで。あれは、つまり、あそこに映ってる犬乃至猫は、自分の像やから気にせんでええ、ちゅうことがわかるからやないのか。

学 それがそうともいえんのや。あそこに映ってる犬乃至猫は、何者か知らんが、あそこに限って出没するだけやさかい、放っといてもかまへん、ちゅう割り切り方で済ましてるかも判らへんやないか。

猿 それもそうやな。そうすると、犬、猫、類人猿、サル、どれがどれちゅう区別はつかんのか。そんなことないやろ。

学 こまかいことは判らんし、生活の仕方の全然違うもんどうしは比較しにくいこともあるけど、サルと類人猿とでは、差は出るちゅう話や。その話によると、お前らサルの仲間については、鏡に映ってるのが自分の姿や、て分ってるちゅう証拠がないそうな。ところが類人猿やと、ちゃんとわかるらしいで。

猿 何でそんなことがわかるねん。

学 ある心理学者がな、チンパンジーを麻酔で眠らしといてやな、目の上に赤い印つけといたんやで。麻酔からさめたチンパンジーが鏡見たら、鏡の中の顔に、赤い印がついたある。そのチンパンジーは、そこでぐっと鏡に顔を近づけて、鏡見もって指で目の上こすりはじめたちゅうねん。

猿 うまいことやりよったな。そこに映ってるのがおのれの顔や思わなんだら、そんなことせえへんわな。せやけど、わしやったら、鏡の面さわって混乱さしたるけどな。

学 何いうてんねん。鏡面で指の頭がかち合うだけやないか。すんなりと「あかん・ベケ」いう方へお前のカードが分類されるだけじゃ。

猿 何じゃい、サルを差別しよってからに。そやけど、何やあやしいような感じもするで。鏡像認知は、たしかにええ思い付きかも知らんけど、それから自己客観視の能力が、知的能力一般の発達の程度と平行しててもええけど、何やこう、もひとつなあ、何ちゅうか、その……

学 何ぐずぐずいうとんのじゃ。今の話は一つの例として紹介しただけや。そういう身体的基盤や諸条件は、そういうこととしてやな、さいぜんいいかけてた、集団の中での個体の自己客観視の能力の問題にもとらしてもらおうと、サルの程度——無礼の段は平に御容赦——のもんでも、結構、個体間の諸関係の中で、また個体発生の過程の中で、自己客観視とまではいわずとも、主体の客観化の過程は、かなり違んてるようにも思えるねんけど、どうや。

猿 かなり持ってまわりよったな。それはまあそんなもんでええのやないかと思うけどな、わしの今までの話の筋からいうと、この自己客観視の能力の発揮ちゅうか、有効な発現ちゅうか、主体の客体化が進められる過程は、また、いかえると、自己主張のぶっつけ合いを通じて自己同一性——アイデンティティともいうな——を個体間諸関係の中に確立して行く過程でもあるねん。

学 つまりこうか、主体の客体化の過程は自己同一性確立の過程でもある——自己客観視の能力は、“我と汝”の関係を通じて、相手の表出を読む能力でもある——わけやな。

猿 そうや、それが伝達機構を保持してるもとや。共同化過程というてもええな。コミュニケーションやからな。コミュニケーションを共同化過程と承知するとすると、お前が最初にいうてた“情報の送受伝達”とたいぶへだたりが出て来たやろ。

学 そやな、ふつうは“情報の送受伝達”乃至はその機構ちゅうとこやろかな。

猿 そこがわしにいわずと、機能論的還元主義から来るわい小化された理解やねん。そしてそれがまた伝達にかかわる諸行動をめぐっての、無数の事実誤認の発生源にもなってるねん。お前らの仲間の学者が、昔からいうて来たことはやな、先ず、“社会的諸関係”ができる。つまり集団を形づくる要素である個体どうじが、何らかの相互間の引力の如きもんで結びつくちゅうねん。その結びつく力が、セックスやったり、強い弱いの順番やったり、逃避の衝動やったり、母子関係の延長やったり、“集団本能”そのものやったり——要するに、どれもこれもろくなもんやないが——、何せその程度の手でとりあえず結びついといてやで、その上で個体間の情報伝達を行うて、集団活動を調整するんや、と、こういうこっちゃ。社会機構の中で情報伝達が、いかに有効に機能しつつ、必要な諸活動を活性化するか、ちゅう、今はやりの、高度情報化社会たらしい発想にべったりの考えや。

わしのいうてんのは、そやのうて、共同化過程自体のことやさかい、個体間の結びつき自体が伝達によって形づくられるねん。そやから伝達行動という特別特殊の行動型が他にあって作用するんやない。前にもいふたけど、伝達に関わるいろいろな種類の行動が、時と場合に応じて、交々（こもごも）動く、ちゅう考え方や。関り合おうという傾向を、わしらが互いに持ち続ける限り、集団は、半端な外力を持って来んかて維持できるねん。サルは、その種に特有の社会構造を持つてだけやさかい、その構造をやたら変えよとせんけども、これが人間やってみい、伝達は共同化過程や、ちゅう思想は、社会変革に結びつくて。“高度情報化社会”の中での情報伝達は、その反対や。技術的な進歩や改良はええけど、“資本主義体制における支配被支配の統合原理”は、絶対に変ってもろたらかなん、ちゅう考えがその基底にあるねん。そやから体制側にしたら、せひとも伝達概念はわい小化されてる必要があるねん。肥大した権力機構の維持には、情報伝達システムの集中管理が、暴力装置の集中管理と並んで、必要やさかいにな。

学 おもしろいこといわんとってくれ。

ところで、お前のいう、わい小化されてない、共同化過程としての本来の伝達過程において、相互確証と同時に進行する自己同一性確立の過程ちゅうやつが、ニホンサルの“自分自身を知る”やり方や、てことになるんやな。

猿 そうや、この過程は、他のサルや、サル以外の高等な動物にも基本的に共通やないかと思うて。お前がさいぜんいうてた“自己客観視”の能力には、当然ながら、知的能力一般についての種間の差がともなうやろけど、どの種であれ、それなりに、自己同一性確立過程の中で、それぞれ“自分自身を知”ってるのやないか。わしらかて、チンパンジーやらとは差がありながらも、その過程の基本はちゃんと具わってるねん。女自身を知れ、ノスケ・テ・イブスムちゅうやっちゃわな。

それとな、これにはもう一つ、動物の集団生活を研究する上で大事な概念である、“個性”の発達の問題が関わってるねん。

学 “個性”か、それもついでに聞いときたいと思てたんやが、これもちょっとむずかしいことの一つで、自分自身を知る知らんの問題もしくは個体間の相互認知の問題ともからまって昔から何とどのうあいまいに使われて来てたことばや。お前自身はどう承知してるか聞かしてくれ。

猿 わしのいうてる個性は individuality つまり個体というもんが、自己同一性をもった、かけがえのない独自の存在や、いうことを示す概念や。

学 個性とはちゅうのか。

猿 違うな。個性は personality や。その個体の性格上の特徴のことや。

学 個体差ともちゅうのか。

猿 違うな。個体差は、任意の基準に照らしてそれぞれの個体が互いにどう異なってるか、ちゅう個体間の差異のことや。もともとフィジカルに計量される差異を指すことから出てる。個性も計測されることはあるけど、こっちはメンタルな方やな。どっちにしても、具体的な存在としての個体に即して用いる概念や。個性はより抽象度が高い。差異概念も含み得るが、それにとどまらん。相互に独自性をもってること、そのことを意味するねん。わかるか？ 早い話が個体差は、ただ差がありさえしたらええ。個性は、他がどうあれ自分のやり方で通しさえしたらええ。そやけど個性は、動物がおれはおれ、お前はお前という相互の関係を、何らかのかたちで認知するところに成立するもんや。もちろんその認知の程度には種によって自ら高低の違いはあるが、そやから、個性が発達してるとか、あまりしてへんとかいうねん。

学 ははあ、そうすると個性の発達というもんは、個体によるもんやのうて、種によるもんや、というわけか。

猿 その通り。

学 そうすると 個体発生やのうて系統発生段階にその根拠をもつもんやというわけか。

猿 その通り。

学 そうすると、いやひょっとすると、それは大脳皮質の発達にともなう 知的能力の発達と密接に関係してるもんか。

猿 その通り —— やと思うて。

学 それで相互の関係の認知の程度のことをいひよったんやな。そうすると、個性性のより発達したもん同士でつくる集団では、我 — うな関係がより明瞭で、自分自身を知る程度もより高度や、ちゅうことになるわけか。

猿 わしはそう考えてる。そやから個性性のより発達してる動物の集団生活について行動をしらべるときは、特に社会的伝達に関わる諸行動が どのように相互に複雑に関係し合って出現してるか、を観察することが大事やと思うて。鏡像認知もそれはそれで結構やけどな。

学 知能テストも結構やけど、日常の伝達をめぐる諸行動をもっとよう見てたら、サルが、どれくらい自分ちゅうもんを知ってるか、他個体の存在もしくは自他の関係をどれくらいわかってるか、がもうちょっとよう理解できるのやないか、て、そないいいたいわけか。

猿 まあそうや。そこまでわかりかけて来たらもうちょっとやな。

. . . . .

猿 あかんほのチンポは、あれ何や、性器か？ お前どない思う？

学 何をいひ出すねん、だしぬけに。そんなもん生殖器に決ったるがな。

猿 何でや？

学 何でやて、先ず、系統発生的にあれは泌尿生殖器系としてでけたある。また生理的にはそう機能するべく仕掛けられてる。

猿 泌尿器はわかるで。せやけど、性的に成熟しとらん、精子形成もでけとらん状態でも性器か。

学 お前は一体何をいひたいねん。ペニスを性器やいうてどこが悪い。それとも何か、あかんほにまで性的非行年齢が下がって来た時に、性器準備集合罪か何かが適用される事態を懸念してるのか？

猿 あほなこというな。わしのいいたいのはやな、チンポを使うた行動、チンポに向けられた行動を、何でもかんでも、性器が関わってるさかいいうて 性行動や、ときめつけよる奴が多いのが気がかりや、ちゅうこっちゃ。性行動とはっきりいえるかどうかわからんのに、チンポが関係してるのが何よりの証拠や、てない方するのは、おかしいことないか？ と考えてるうちに、あかんほのチンポは果して性器というに値するや否や、という、世紀の大命題に達着したんや。

学 何や話がわけさになったなあ。わしなんか、単純にペニスは性器、性器を用いた、あるいはそれにかからむ行動は性行動、と割り切ったかて、大した問題にはならんと思うけどなあ、性成熟

の問題かて、いずれはそうなるもんやから、精子形成が起こるか起こらんかをそない神経質に考えんかてええのやないか。何かこう、瑣末な、議論のための議論みたいに関こえるて。

猿 そらな、お前は単純やさかい、それでええかも知らんけどな、この問題はそない単純でも瑣末でもないねんぞ。だいたいやな、いつも議論のための議論してるのは、お前ら学者の方やないか。わしが今日チンポ論はじめたんは、学者が勝手に思いこんでる旧来の迷信を打破したろと考えたからやて。どうも近頃の学者は、ものごとを不思議やと思て問いつめて行くしつこさがない。動物が動物の暮らししてて、そのことを自分で何のふしぎとも思わんのは、当たり前や。それをあらためてふしぎやなあて思うのは動物学者や、ちゅうて嗽石はんかていうてはるやないか。

学 嗽石て、あの夏目漱石のことか？

猿 さいな、千円札のおっさんや。

学 嗽石がそんなこというたんか。

猿 嗽石はんが「マードック先生の日本歴史」いうエッセイの中で、そないいうてはるねん。ええこというがな、やっぱり。含蓄のあることばやないかいな。ところがやて、きょう日の学者は、何見たかてちょっともふしぎの心を起こしよらん。動物一般と変らん。体制に飼われてだんだん家畜化してきよったんとちゃうか。

学 わかったわかった。お前の話につき合う。そやけど、お前は何てそんなことに疑問をもったんや。

猿 そやから、わしは お前ら学者が何て疑問をもたんのや、て聞こうとしてんねやないか。その、さいせんいうてた、あかんぼのチンポは性器かちゅう話。

学 何て疑問もたんか、てか。あのな、こないだも、前にお前が居てた群れの、あかんぼの集まり見てたんやけどな、オスのあかんぼが、なかまの背中に いっしょけんめい自分のペニスこすりつけよるねん。馬のりみたいに乗るかかってやるときも ペニスだけを押すつけるときもあつたけどな。あんな自転車の虫ゴムみたいなペニスでも、長う伸びてよつたところ見ると、結構興奮してんのと違うか。あらやっぱり性器としか思えんて。

猿 そうか。お前そのあかんぼ何してたとと思う？

学 わしは馬のりの行動の初期の発現状況やと見たな。

猿 そら間違いのないとこやろな。それで、その行動をどう名づける。

学 乗りかかりと押さえつけとこすりつけやな。行動要素からいうたらな。

猿 こすりつけは、前二者の動因になってると思うか？

学 なってると見えるときも、そうとは見えんときもあつた。こすりつけだけでもあつたしな。

猿 そのこすりつけは 何でしよと思た？

学 まあ ごく自然に考えて、ペニスに対する刺激の追求やな。

猿 そこやがな。そこやがな。それ何や？ 性行動か？

学 まあそうや。性器に対する刺激追求やさかいな。

猿 そうすると馬のり行動、つまりマウンティングの動因は、性器に対する刺激追求やてお前はいいたいんやな。

学 それはもちろんやけど、それだけやないやろ。優位の誇示ちゅう動因もあるさかいな。とくに大きゅうなってからは。それと緊張解消もあるやろな。

猿 何や お前の話は、いつもら列的やなあ。もっとも性と優劣とをひっつけたがる連中も困るけどな。しかしまあそれは後まわしや。ところで、性器に対する刺激追求の話やけどな、これと共通と見られる行動は、他に見たことないか？

学 メスのこどもにあったな。一歳すぎたころから、地べたに、クリトリスこすりつける、あれや。

猿 皮膚の接触刺激一般に話を広げたらどないなる？

学 これは、抱きつきとか、その時に相手の耳をくわえてしゃぶるとか。そうか、しゃぶるというたら、母親が哺乳中の自分のあかんほのスクロータム（陰のう）をしゃぶるちゅうのも見たことあったな。ペニスもついてみたいにときどきしゃぶってたな。あれは変っとるで。

猿 ちょっと脱線やけど、それも性器に向けての行動やさかい、お前やったら性行動に入れるのと違うか。学

学 入れなしゃあないやろな。母親のオスの子に対する性行動としてな。

猿 さてと、いろいろとお前の見たこと聞かしてもろたけど、もういっぺん話の始めに帰って、性器を用いた、あるいは性器に向けての行動は、性行動や、というお前の考え方について聞いてみたい。性行動を起こさせる衝動は性衝動やったな。その性衝動がたかまる生理的状态は、野外で行動見てるだけではわからんけれども 起こりそうかどうかの見当ぐらいはつくやろ。お前のいうてる例で、性衝動のたかまってそうな例あったか？

学 そうやなあ。何ともいえんなあ。

猿 内分泌が、常に衝動の生理学的根拠にあるとしたら、お前のあげた例は、どれもこれもベケやぞ。あかんほのチンポやろ、それから、一歳のこどものクリトリスやろ、それから授乳中の母親やろ。これたいていあかんで。それから一つ聞くけど、お前が見てた時にやな、こういう連中、性的に興奮してるように見えたか？ えらい熱中してるみたいやったか？ それから欲求不満みたいなそぶり見えたか？

学 いやあ、どれもそんなふうには見えへんかったなあ、そないいうたら。

猿 そやろ。そやろと思たわ。それでわしがはじめから疑うててんがな。

<気の毒ですが、まだ当分続きます — 会長>

う そ

真実に反すること、またはそういう概念。色は赤くその数800にして<38という説もあるよ>時にマコトを生むというのは、よく知られた性質である。古今東西の人間社会のありとあらゆる所に出現し、真実よりもはるかに多く存在すると言われる。ある事柄がウソであるかどうかは、それを言った本人ですらよくわからないことがあり、従来、ウソ発見は大変困難とされていた。ところが最近、ウソ発見の有効な方法がハンジツ大学のダウトレル教授により報告された。

シリアの首都、ダマスカスの近郊に生える砂ばく植物、ニセデマカセモドキの根からとれるウソキエリンという物質がある。これを、同植物の葉からとれるウソキエラーゼという酵素とともに人に飲ませると、発言の中のウソの部分は他の人の耳に聞こえなくなるという。<ごく最近、ある教授に飲ませてみた所、身体ごと消えてしまったという事件が起こった。しかし、死体がないので殺人事件にするわけにもいかず、警察も困っているということである> また、ウソキエリンを書物に振りかけると、その本のウソの部分だけが消えてしまい、はなはだしい場合にはタイトルまで消えてページ数のみが残るという。これを、ウソキエリン-ウソキエラーゼ反応と呼ぶ。ダウトレル教授の実験により、多くの同僚の教授はオシとなり、また教科書はほとんど白紙となって、ハンジツ大学は大混乱をきたした。以来、「人類の文化を守るため」という名目で、ウソキエリンの使用は禁止されてしまった。なお、当のダウトレル教授の論文もほとんどが白紙となったが、次の一文は消えずに残っている。

「実はニセデマカセモドキの木には、根も葉もない。」 (→「大学」：第18号p. 630)

(非)

## しいの実拾いの記

栗 間 修 平

毎年、秋になると、私はしいの実を拾うのをささやかな楽しみとしている。このごろは、世の中がせい沢になり、しいの実を拾って食べるなどという人は滅多にいないようだ。それどころか、しいの実が食べれるシロモノだということも知らない人や、しいの実とどんぐりの区別もつかない人が多い。しいの実はナマのまま食べてもおいしいし、いって食べればまた香ばしく格別な味がする。

私がここ十年来、秋になるとしいの実を拾っている場所は、地上げ屋の暗躍する都心の一等地とも言える場所である。国電（注1）信濃町駅を降り、四谷方向にちょっと歩いた所に T 会館という建物がある。私の本来の職場は神田にあるのだが、この信濃町の T 会館を使って仕事することが多い。一と月の半分近く、この T 会館に行っていることもある。

T 会館の前の坂道を下って行き、国電と高速道路のガードをくぐってしばらく歩くと、東宮御所の門の前に出る。その門の前を左折して坂道を登って行くと、そこには迎賓館がそびえ立っている。T 会館の周辺からは、東宮御所のうっそうと繁った森を隔てて、迎賓館の裏側が真正面に見える。私のしいの実拾いの現場は、そんな一等地である。

T 会館のすぐ傍の道路沿いに、三本の大きなしいの木が植わっている。しいの実はしいの木の下に落ちている。本会会員である金沢大学の斎藤先生は、金大の植物園にしいの実が落ちているという話を耳にし、早速それを拾いに行こうとした。そして、当時植物園を管理していた S 氏に「しいの実はどこにありますか？」とたずねた。S 氏の答は、「しいの木の下に落ちてるよ」。<そういえば、毎年ごちそうになっているのに、今年はまだ食べさせてもらっていない。斎藤先生ももう齢かな - 会長> 東京でも金沢でも、しいの実はしいの木の下に落ちている。

三～四年前までは、私のしいの実拾いは、この T 会館の傍の三本の木の下で行なわれていた。しいの木が道路沿いにあるとは言っても、そのしいの木の道路との間には金網のフェンスが存在する。しいの実は路上にも沢山落ちているのだが、その多くは通行人や車によって踏みつぶされてしまっている。ちゃんとしたしいの実を拾うには、フェンスの中へ入りこまなければならない。しかし、気の小さい私 <信じられない - 会長> にはフェンスを乗り越える勇気はなかった。<体力がなかったんだろう> というのも、フェンスの向うにしいの木があり、そのしいの木の向うにも

うひとつコンクリートの壁があった。その壁の向うは、今はどこかに引越してしまったけど、当時は中米の某国の大使館だった。コンクリートの壁までが大使館の敷地なのか、それとも金網のフェンスまでがそうなのか？ ちょっと判断に苦しんだ。しいの実欲しさのあまりにフェンスを乗り越えて、その結果外交問題にまで発展したらどうしようか？ そう思うと、私にはフェンスの中に入りこむ勇気がわいてこなかった。＜アメリカ大使館打ち入りの勇気なら、すぐわいてくるのにね＞ そうなると、仕方がないので、フェンスの金網の間から手を入れて近くに落ちているしいの実を拾うしかない。それではいくらもししいの実を拾うことはできない。＜じれったいね＞ 棒を持って来て金網の間からさしこみ、それで手前になぐり寄せて、フェンスの中のしいの実をかき集めたりもした。そんな私の苦闘を、通行人たちは冷ややかな眼をして見て行くことが多かった。時々、小学生や幼稚園児といった小さな子供たちが、

「おじさん、何してるの？」と声をかけてきた。

「しいの実を拾っているんだよ」と答えると、馬鹿にしたような顔をして立ち去る子供もいれば、私に協力してしいの実を拾ってくれる子供もいた。＜前者は出世し、後者は落ちこぼれる＞

私がしいの実を拾う時間は、いわゆる就業時間中である。今の職場に入って最初の秋、T会館で仕事をしている(?)途中を抜け出してしいの実拾いに行った私は、当時の私の上司であった部長から、

「クリマ君、君はここへ仕事をしに来ているのかね？ それとも、しいの実を拾いに来ているのかね？」といや味たっぷり聞かれたことがある。私は、はたと迷った。「仕事をしに来ています」と答えると、翌日からはしいの実拾いに行き辛くなる。かと言って、「しいの実を拾いに来ています」と正直に答えると、彼は怒り出すだろう。そこで私は何も答えずにおいた。そして、その翌日もまた何食わぬ顔をしてしいの実を拾いに行った。その部長は「こいつに何か言ってもしょうがない」と思ったのだろうか、それ以後、私のしいの実拾いに関しては、何も口をはさまなくなった。

昨年、その部長も退職した。新任の上司には、申し送りがあったかどうかは知らないが、新しい上司は私のしいの実拾いに対して、干渉がましいことは一つも口にしな。＜うっかり言うと、コワイ人というのは、どこの職場にもいるものだよ＞ いやむしろ、私のしいの実拾いの攻防を楽しんでるフツも見受けられる。何故、平和なしいの実拾いを“攻防”などというキナ臭い言葉で表現せざるをえないのか、それは後述する。

私は、三～四年前まではT会館のそばの某国大使館のわきでしいの実を拾っていた、と誓った。何故、三～四年前までなのか？ 実は、三～四年前、その三本のしいの木の枝がごっそりと伐られてしまった。しいの木そのものは存在し、そして新しい枝が伸びはじめてはいるのだが、現在のところ、まだかつてのようにたわわにしいの実をつけるには到っていない。

ある日、きれいに枝を伐られてしまい裸になったしいの木を目にして、私の小さなく？をつけ

おくべきだね>胸は痛んだ。毎年しいの実を拾うのをささやかな楽しみにしている私の心の中に土足で踏み込まれたような気がした。枝を伐った者はだれだ？<!とちゃうか>「伐採職人のおっさんだ」などと答えないうでいただきたい。<アメリカを発見したのはだれだ？ コロンブスの船の見張り員だ、という話もあるよ> その職人を雇った“黒幕”がいるはずだ。私に何の恨みがあってしいの枝を伐ったのだ？ もしかしたら、私のしいの実拾いがエスカレードし、私がフェンスを乗り越えるのを恐れた日本政府もしくは某国政府のさしがねか？ それとも、そういう政治的・外交的意図は何もなく、単に私にいやがらせをしようとするだれかの陰謀か？ はたまた、ただ枝が伸びすぎたから伐っただけなのか？<ようそないに沢山考えるなあ。頭がいいのか？ ヒマなのか？ はたまた、被害モウソウか？> 私は怒りにうちふるえながら、しいの枝を伐った者の意図を読みとろうとした。様々な仮説をたてて推理したのだが、結論は「枝が伸びすぎた為」というところに落ち着いた。

しかしそれでも、私は黙って引き退りたくはない。ささやかな楽しみを奪われでなるものか！ 実は、近くにもう一か所しいの木の生えている所があった。某国大使館から約20メートルほど信濃町駅寄りにもどった所に公園がある。その公園の中に六〜七本のしいの木が生えている。木の大きさは某国大使館わきほどではないが、しいの実をつけるには十分な枝ぶりである。その年の秋から、私はその公園でしいの実を拾い始めた。公園の中だから、だれに気兼ねすることもない。通行人から冷やかな眼で見られることもない。金網のフェンスの前で苦労することもない。私は落ちているしいの実を喜々として拾った。どこのだれにも、私の楽しみを奪うことは出来ない。私の日ごろの善良な行ないが報ねれた思いがした。

とこそが、その私の喜びも長くは続かなかった。昨年から、その公園でのしいの実拾いもただ喜んでばかりはおれない様相を呈してきた。

昨年秋、いつもの年と同じようにいそいそとしいの実拾いに出かけ、仕事をさぼる喜びと収穫の喜びを二重に満喫しながらしいの実を拾っていた私は、ふと背後に人の気配を感じた。振り向くと、そこにイヤホンを耳にさした眼つきの鋭い男が立っている。その男の漂々すぶん困気は私服刑事以外の何者でもない。昔はともかく、今は善良な市民になっている <怪しいもんや> 私は私服刑事とは何の関わりも無いはずだ。

その男は私の一挙手一投足 <手挙げたり足投げたりしとったんか。そら怪しまれるで> をじっと見つめている。私は少々いやな気分になったが、とりあえずその男を無視してしいの実拾いに神経を集中させた。しばらくしたら、その男が声をかけてきた。

「そこで、何をしているんですか？」

私はわかつ腹が立ったが、努めて平静を装い、

「見りゃわかるだろう。しいの実を拾ってんだよ」と答えた。

「えっ、しいの実？ そんなもの拾って、何にするんですか？」

「食べるんだよ。」

私は、しいの実を食ってどこが悪い、文句あるか、とばかりにつっけんどんに答えた。

「食べるんですか？ そんなもの、食べれるんですか？」

私は、こいつは度し難い奴だなと思ったが、つい日ごろの親切心がわいて来て、一個歯で割って、その場で食べて見せた。そしてさらに一個その男の前につき出し、食ってみるように勧めた。その男は私のさし出したしいの実を手の平に乗せ、ためつすがめつながら食べていたが、思い切って口に入れ、歯で殻を割った。そして中から出てきた白い実をちょっとかじってみた。

「ン、結構おいしいじゃないですか？」

「そうだろ。こんな自然な珍味を知らないなんて、かわいそうだと思うよ。」と私はうそぶき、またしいの実拾いに専念した。

翌日もまた同じ所でしいの実を拾っていた私は、また背後に人の視線を感じた。振り向くと、昨日の男とはまた別の男が私の動きをじっと見つめている。その男も耳にイヤホンをさし、うさん臭そうに私を見ている。

とにかく、昨年の秋は、私とその公園にしいの実拾いに行く度に、私は私服刑事の監視を受けた。まるで日がわりメニューみたいに、毎日違った男が私のしいの実拾いを監視し続けた。＜そりゃするだろうよ、君なら。しなけりゃケイサツの怠慢や＞ 「何をしていますか？」と声をかけてくるデカもいれば、ただ黙って私の動きを見つめているだけのデカもいた。

他人から監視されるというのは、気分のいいものではない。ましてや、警察官の監視を受けるなどというのは、たまったものではない。楽しいはずのしいの実拾いが、一挙に不快なものになってしまった。＜楽しくなくなったが、うれしくなったのだろう。この年のしいの実の収穫は数倍になったのとちゃうか＞ 国家権力は私のささやかな楽しみすら奪い去ろうというのか！ 善良な市民のしいの実拾いにまで干渉の手を伸ばそうというのか！

警察の干渉を受けたからといって、黙ってしいの実拾いを中止してしまうことは、いくら気の小さい私でもプライドが許さない。警察の監視にもめげずに性懲りもなく足繁くしいの実拾いに出かけるのも、一つのレジスタンスではなからうか？ そう思うと、私の不快感も少しは和いだ。＜世の中には縛られて快感を感じる人もいるらしいよ＞ そして、心の中には闘志もわいてきた。＜そら、やっぱり＞

昨年（1986年）のプロ野球日本シリーズは、広島と西武の間で闘われた。その日本シリーズの何戦目かの日だった。私はいつもの様にその公園でしいの実拾いを始めた。しばらくして、いつもの様に背後に視線を感じ、私は振り返った。そこには案の定、そこには耳にイヤホンをさした

私服刑事が立っていた。その男と視線が合うや否や、私はニヤリと笑い、

「おい、今、どっちが勝ってる？」と聞いた。相手は「えっ？」というような顔をして私を見た。

「広島か？西武か？どっちが勝ってるんだよ？」

私は重ねて聞いた。相手はそ知らぬ顔をしている。

「おたく、今、日本シリーズの実況を聞いているんじゃないの？」

私がさらに畳みかけると、その刑事は見るからにいやな顔をした。

私も、刑事が耳にイヤホンをさして、日本シリーズの実況放送を聞いているなどとは、ハナから思っていない。善良な市民 <あんまり“善良、善良”というなよ、“善良”ってどういう意味だったか、わからなくなる> のしいの実拾いにまで干渉がましく監視体制を敷く警察権力をからかってみただけのことである。

かくして、昨年秋から私の平和なしいの実拾いの日々は、警察の監視とそれに対する私のいや味も含めたレジスタンスという攻防の日々と化したのである。<どっちが“攻”でどっちが“防”や>

何故平和なしいの実拾いが、警察の監視まで受けるようになってしまったのか？それは私の全く知り知らない一つの事件がきっかけとなっている。

昨年の5月のゴールデンウィークのころに、“東京サミット”（注2）なるものが開催された。その期間中だったか、それともその直前だったか、過激派の某党派がその公園の近くから迎賓館めがけてロケット弾を射つという事件があった。確か、その一発は迎賓館の屋根を越して、迎賓館の前庭に落ちたはずである。不発弾の一発は T 会館の駐車場に落ちた。

それからというもの、その周辺一帯はものものしい厳戒体制下に入ってしまった。悪いことに、私がしいの実を拾う公園のすぐ裏手に、警察庁の局長クラスの官舎が三軒ある。警察の最高幹部の官舎の目と鼻の先から迎賓館に向かってロケット弾が射たれたものだから、警察はよけいにカリカリ来たであろう。

T 会館の真向いに、S 銀行会館という大きな建物がある。その前庭に警察車両が一台駐車し、その車の中にはいつも二～三人の男たちが待機している。そして路上には、あちらに一人、こちらに一人と私服刑事や制服警官が立っている。そして、自転車に乗ったオマワリがひんぱんに往き来する。時には、乱闘服に身を固めた機動隊も歩きまわる。T 会館周辺は、そんなものものしいふん囲気に包まれてしまった。

しばらくすれば、もとの静かな町にもどるだろう。私はそう思っていた。だが、“東京サミット”が終り、暑い夏が来て公園にセミが鳴くようになって、オマワリたちは立ち去らなかつた。

そして実りの秋が来ても、その周辺一帯の厳戒体制は続いた。

そのあけくの果て、私のしいの実拾いは警察の干渉がましい監視を受けることになってしまった。そして心の安らぐ平和なしいの実拾いが、一転して警察と私との精神的攻防戦の場となってしまった。<“精神的”にとどめておいてくれよな。もらい下げに行くのはかなわん。もっとも、「おかげで助かりました。もうしばらくお願いします」という手もあるが>

それから一年、今年の秋になると、またまたより一層警備体制が強化された。天皇が沖縄へ行くとかいう話があって、その為の厳戒体制が敷かれた。結局は、天皇は手術したりして沖縄へは行かなかった。天皇が腹を切る場所は東京の病院ではなく、沖縄のどこかであるべきだと私は思っている。それはさておき、T会館の周辺からは、前述したように東宮御所の門が目と鼻の先にあり、東宮御所の森を一望の下に見渡すことができる。以前にも増して、制服や私服のオマワリがその周辺の辻々に立ったり徘徊するようになった。信濃町駅の前には機動隊が立ち、何を考えているかわからない、もしかしたら何も考えていないのかもしれないのだが、無表情な面白くもない面で <向うさんだって、そりゃ面白くもないと思うよ> 通行人たちをにらみつけている。せめてミニスカートの娘さんが眼の前を通った時位は少しはスケベっらしい顔でもした方が人間らしいと、私は思うのだが……。<そんなことするオマワリさんは出世しないよ。別にオマワリさんに限らんが。実例は当会会員の中に、はいて捨てるほどいる>

そうした厳戒体制を眼の当りにして私は、今年のしいの実拾いは昨年以上に困難で厳しい情勢下に置かれることを予感した。しかし、情勢が厳しくなったからといって、すこすことしいの実拾いの戦場から逃げてしまう訳にはいかない。<それを“右翼日和見主義”という。懐しい言葉だね> 情勢が厳しければ厳しい程、しいの実を拾うという私の行為にも重大な社会的意味があるような気がしてきた。それに、あのかわいいしいの実が私に拾われるのを待っている。<待っていないよ、食べられてしまうんだもんー しいの実> そのしいの実の期待を裏切ってはならない。<これが“左翼冒険主義”である>

私は、今年も断固としてしいの実拾いに立ち上がった。<!!が欲しいところだね>

私が公園へしいの実拾いに行くと、案の定、昨年同様に私服刑事が私の背後にはりついた。昨年と今年の違いはというと、今年は公園の入口に制服のオマワリが立っている。私がしいの実拾いに公園へ入っていく時には、そのオマワリは一人で公園の入口につっ立っている。ところが私がしいの実拾いを終えて公園から出ていく時には、どういふ訳か、そのオマワリの数が必ず増えている。3人になってることもあれば、乱断服の機動隊も混じえて5～6人になっていることもある。私はそのオマワリたちの間をかいくぐるようにして公園から出て行く。警察権力にとって、公園でしいの実を拾われるということがそんなに恐怖なものなのだろうか？

一度は、私が公園に入ってしいの実を拾い始めたら、その公園で遊んでいた幼稚園帰りの三人の子供が私のまわりにやってきた。

「おじさん、何してるの？」

「しいの実を拾ってるんだよ」

私が答えると、その子たちも私に協力してしいの実を拾い始めた。しばらくすると、どこからかネコが姿を現わした。子供たちはしいの実拾いをやめて、ネコと一緒に遊びながら、私のまわりから去っていった。それから間もなく私服刑事が私の背後に立った。子供が来て、ネコが来て、今度はイヌか、と私は心の中でつぶやきながらしいの実を拾った。子供たちが私と一緒にしいの実を拾っている時には、そのデカは公園の向う側のベンチに腰かけて私たちの方を見ていた。子供たちが私のまわりからいなくなるや否や、そのデカは私をまわりをうろつき始めた。これはどういうことなのだろうか？ しいの実拾いは子供には許されるが、大人には許されないということなのだろうか？ それとも、しいの実を拾っているまわりをうろついて、いたいけな子供から「おじさん、何してるの？」と問いかけられるのが、デカは怖かったのだろうか？

とにかく私は今年も昨年以上の警察の干渉がましい監視を受けながらも、しいの実拾いを貫徹した。今年の収穫は約1升。今これを書きながらも、ポリポリと食べている。その味はまた格別である。

お前がしいの実を拾った場所が悪いんだ。迎賓館や東宮御所の近くでしいの実を拾うから、警察の監視を受けるんだ。どこかよそでしいの実を拾えば、だれも文句はいわないし、警察も監視したりはしないんだ。そんなふうに言う人もいるだろう。確かにその通りで、私が金沢大学の植木園でしいの実拾いに精出したり、あるいはどこかの山の中でしいの実を拾ったにしても、わざわざ私服刑事が私のしいの実拾いを監視しに来たりはしないだろう。＜来たら面白いね。何百人か動員して、方々の山へしいの実を拾いに行かしたら、都内の警備は手薄になる＞

しかし、私がどこでしいの実を拾おうと自由なはずである。金大の植木園であろうと、＜ちゃんと許可をとっていただきたいー金沢大学植木園長＞迎賓館の見える公園であろうと……。おそれ多くも迎賓館や東宮御所の近くのしいの実を下々の民が拾って食うのはまかりならん、ということは無いはずである。ところが、迎賓館や東宮御所の見える公園でしいの実を拾うと、警察官がやって来る。そのことの持つ意味を考えてみる必要があると思う。

日本は治安のいい国だそうである。しかし、その治安が庶民のしいの実拾いにまで監視の眼を光らせながら維持されているとするならば、一体だれのための治安維持なのか、底が見えてくる。公安警察の肥大化が世の中にどういった影響をつくり出していくのか、私には非常に気がかりである。＜ボクもそう思う＞もしかしたら、来年は私にはしいの実を拾う自由も無いのかもしれない。そんな心配を今からしながら、来年のしいの実拾いの戦略を今から練っている。＜“左

翼冒險主義”でがんばれ！ 後に「日本生物学会」がついている……あんまり頼りにはならんね>

( 完 )

注1：“国電”という名称は、現在は使われていない。JRでは“E電”などという手前みそな呼び方をしている。しかし、私は“国電”という名にこだわる気持があるから、敢えてこの名を使う。<この間の新聞に、E電は評判悪くてだれも使わない、という記事が出たね。君の見解が大衆に支持されるなんて、滅多にないことだ。もっとも、だから国電を使おうという意見はなかったみたいだけ>

注2：私は“日本生物学会東京支部長”である。“東京支部長”以外にも、東京には日本生物学会の“支部長”がいっぱいいるらしい。<ゴマンといるよ。でも多くは行方不明になっている>そこで、東京支部長としてその支部長の方々に呼びかけたい。一度、“日本生物学会・東京サミット”を開きませんか。目的とか趣旨といったものは何もなく、ただ集まって飲むだけで、この“東京サミット”は恐らく成功するでしょう。この“東京サミット”の爆砕を叫ぶ人が出て来ると、それはそれでまた面白いし……。

<支部のことには本部は関知しないから、サミットでもコミックでも何やってもよろしいが、一つだけ忠告しておく、君以外の“支部長”はすべて100円会員で、その100円すら滞納するという、典型的東大生が多いから、飲み代全部たかられるよ>

セイシンメンエキー 精神免疫

一般的に免疫というと、ある外部からの侵入者に対して防御機構が存在することを示す。従って免疫が出来上がった後に抗原となるものを加えると、しばしば過敏に反応し、いわゆるアナフィラキシー（過敏症）をひきおこす。これに対して精神免疫においては、一般に全く逆の過程が見られる。つまり、精神的に免疫されたと言われる者に対しての精神的抗原は、免疫寛容を示すことが多い。また、精神的なアナフィラキシーを示す（具体的には、「その話は聞きたくない！」という意味の言動、行動によって示される）者は、その精神抗原に対して、ほとんどさらされたことのない者である場合が多いようである。

この実験に対するコントロールはほとんど不可能であり、また有効な測定法も（特に定量的なもの）はほとんどないのが現状であるが、次の事は言えるであろう。一つは、精神免疫と現在思われている反応が、実は一般の免疫寛容において見られるように、多量の精神抗原による精神免疫寛容である、ということである。つまり、アナフィラキシーを示す者は、実はそれ以前に精神免疫を受けていたのである。もう一つは、精神免疫は一般の免疫とは全く違うものである、という可能性であるが、これを支持する証拠は少ない。

筆者は現在、前者を支持する証拠を集めているが、精神抗原の定量法についていくらか問題点があり、この方面についてのより詳細な研究が待たれている。

※ F氏が多くのデータを持っているらしいよー 3局長

※ なにしる、氏のまわりには、かっこの“材料”がごろごろしているから…… ー 非

※ そんなデータも材料もないわよ。貴方の方が良い材料になりそうね ー F

※ わけのわからんこと書いて、貴重な誌面をつぶすな ー 会長

## 統 辭 酌 歌 心 正 体 学

上 市 米

(7) あまの原 ふりさけみれば かすがなる みかさの山に いでし月かも  
安倍仲磨の詠める歌、『古今和歌集』巻九に出る。「日本晁卿辞帝都」、唐政府高官晁衡こと仲磨は三十有余年に亘る唐土滞在の帰路に難破して安南に漂着し、その後再び長安に戻ったという噂もあるが、日本に帰ることはなかった。蘇敬が高宗の許により『新修本草』、いわゆる『唐本草』、を完成させてから95年が過ぎた時のことである。この歌を詠んだのは、彼晁衡の送別会の席とも、遭難して全滅した船中であるとも、あるいは実は帰国する気など全くなくて人目を盗んで脱走し、隔地での研究三昧の気ままな日々を独り安気に送った安南のアダンの繁る浜辺でことばでだけはしおらしく望郷の念を表わしたのだとも伝えられるが、それを誰がどのようにして伝えたのかを審らかにした話はあまり聞かない。首なし美人とかヴェイカントニッチとかの類で謎を秘める。元の歌は、

あまのはら ふりさけみれば かすかなる しらがのままに いでしつきかも  
であると言う。講授する師の後姿を見上げて、ふと目を惹かれる。嗚呼、吾が師も老翁れたわい、とつい涙しそうになった感傷が露骨に伝わってくる。師我の差はあるが同趣の歌に、

春の日の ひかりにあたる 我なれど かしらの誓と なるぞわびしき  
というのがある。文屋康秀の歌で、『古今和歌集』巻一に出る。已んぬる鼓、今昔の念に触発されて個体における、個体群における、種における、生命における時の問題に思いを至す生物哲学はない。ましてや、広大無辺の動機と展開を構想する発案もなく、唯単に時間に随伴する肉体の変容をことばにして描き出すことによって心情的な共感から普遍性に解放されると見た錯誤が、品性の卑俗さを露呈している。選んだ言葉も平凡低俗、アマノハラなどと誰かを思わせぶりなのも腹立たしい。本学で斟酌するに値しない歌である。

(8) 逢ひみでの 後の心に くらぶれば 昔は物を 思はざりけり  
中納言敦忠の歌。『拾遺和歌集』恋一に出る。賈人、即ち選抜試験受験生の心境を詠んだ歌とされる。寒々とした足音に送られて来た試験を見た瞬間、あっと息を呑む。迂闊であった。悔悟を追って絶望が逆巻く。あれは理科教育法の期末試験だった。開き直って冷静さを回復すると、却て透徹となる。思い浮かんだ一首を記す。後日伝え聞いたところによると、59点で落第だった。敵も然る者とその人はすっかり白くなった頭を叩いて笑いながら語って呉れた。しかし、これではいかにも軽薄皮相に映る。真意は「在る観ての」なのである。在る、即ち存在



のことに責任が無いと言えは無責任になります」と前置きするが、それは文字通りその通りで、言い訳する理はない。「全体は部分より大きい」というが、このく公理がそれによって一歩も前進することのない空しい同義反復に過ぎないことは、エンゲルスも喝破しているところである。だからアリにとって重要なことは、有りは在りだということではなくて、アリとじて在るものであると自覚せしめられているところのもの、その在り方、とりも直さず存在様式だということである。その所以は、曰く「運動とは物質の存在様式である」であり、曰く「生命とは蛋白質の存在様式である」であり、また曰く「生活とは生物の存在様式である」とする存在様式である。昔は物を思はざりけり、「偏見の鎖を断ち、経験の炬火で武装せよ。自然が諸君を取り残した無知の状態から、自然に対してあしざまの結論をひきだすかわりに、当然自然の受くべき名誉を自然に捧げるがいい。」(ラ・メトリ、『人間機械論』)。これは真に奇解な歌である。

(9) 郭公 いかなるゆゑの 契りにて かかる声ある 鳥となるらむ

『山家集』に出る西行の歌。身から出た鎮である。「郭公」の場合、問題は声そのものではなく「山」である(前出)。山というが、その山はどここの山かということである。具体的な生息場所である。生息場所というのと生活場所というのとどう違うのかよく判らないが、明治の頃は住所と言っていた。最近の動物生態学の本を見るとたいてい生息場所と書いてある。生息を殺して声を潜めてうずくまっているようで、陰気なごとはである。その生息場所を知りどれくらい居るかを知るには、科学的に厳密な調査が必要と言う。「現存量を求めるには、ふつう定量的な採集が行なわれる。すなわち、...原則として、生物を採集して測定あるいは分析することが不可欠であり、それが単位空間当たりとして求められるためには、ある一定空間内の生物の総量が知られるような一最も簡明には対象とする空間の大きさが知られ、かつそれに対して生物の採集が完全に行なわれて総量が知れるような一定量のものでなければならぬ」(原田英司、『海の生態学』)ともったいぶって言うが、何のことはない、要するにローラー作戦である。それが功を奏さなくて、それでも見付からなければ、居なかったということになるであろうか。そんな筈はない、荷処分に潜伏しているに決まっている、もう一度性根を入れて捜査しろ、草の根を分けても探し出せ、見付かるまで採集を諦めるな、と厳命が下るであろう。そもそも見付かるまでということとはそこに居なければならぬ、居るのだと予断しているのに外ならないのであり、だから、見付からなかったという結果が出る調査などは、それがいかに科学的で精密であっても信用できるものにはなり得ないのである。実際、絶滅したと教えていたく生きた化石が発見されると、生物学者共は前言をけろりと忘れて一般大衆を巻き込んで狂喜する。誰も咎めはしない。こんなことがあるなんて全く奇蹟だ、と集団で自慰する。実は至極当然のことである。生息していないのでもなければ、絶滅したのでもない、

その証拠にその証拠は何もない。紀伊半島の果無山系には今でもニホンオオカミが生きている、と信じて疑わない獵人が確実にいる。乱山深处、重々たる山塊を悠然と彷徨しており、その証に、百邑万狗の吠声がふと途絶える夜があると言う。御用犬と一匹狼の格の違いである。こちらの方は擬がある。狼ほどではないにしても、鳥も捕獲したり姿を看るのが難しいようで、これは声を算えてその数を知るのだそうである。「お出かけに一声かけて謹かけて」というように、声の単位は声であるから、声を算えれば声の数は分かるし、従って鳥の数も知れる。単純明快である。

よをこめて とりのそらねは はかるとも よにおおさかの せきはゆるさじ  
『後拾遺和歌集』巻二にある清少納言の詠んだ歌である。昼夜兼行で鳥の数を算えてみたところで、だからといって大主典の職席に就けるというものではない。当たり前であろう。だけど算える以外にする事を思い付かないのなら、それも止むを得ない。昔はどうだったかをこの方法で知るには少々厄介な手続きを必要とする。少なくともその昔の前に予め声を残す何らかの細工をしておかねばならない。化石は語ると言われるのは、それに細工がしてあるからである。バッタ類の化石には雄が羽に発音器をもっているものがあり、原始的なセミ類には鼓膜はあるが振動板がないそうである。尤も、だから鳴いたのか鳴かなかったのか、学者は巧妙に言を避けている。始祖鳥に似せて声を作る人もあるが、只管けたたましい許りで心がない。心とは「つ」の字は助字にて心なし」というそれである。始祖鳥の名誉のために申し添えれば、ジュラ紀の始祖鳥の声に味わいがなかったと言うものではない。昔の郭公が鳴いたか鳴かなかったかの評定にも科学的な検査はその程度には役立つかも知れないが、我々の主題を思い出そう。問題は何処の山かということであり、その系として往時も今も同じ山であるのかということである。前出の持統天皇の歌、

春過ぎて 夏来るらし 白妙の 衣ほしたり 天の香来山  
からも、あるいはその他のあまたの歌、たとえば、

田児の浦ゆ うち出て見れば 真白にぞ 不尽の高嶺に 雪はふりける  
(山部赤人、『万葉集』巻三)

鳴神の おとのみ聞きし 巻向の 檜原の山を 今日見つるかも  
(柿本人麻呂、『万葉集』巻七)

などからも鮮明なように、山は古来本来的には鑑る対象である。「山がそこにあるから登る」などというのは、他愛もない戯言である。現に、さる高名な生態学者にして進化学者かつ登山学者氏も国内1500山登頂で「あほらしゅうなった」と一度はくたびれた尻をまくった。

山里は 冬ぞ淋しさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば  
源宇千朝臣の歌。『古今和歌集』巻六に出る。山里と一括して山地と人里を混同しているのは

論外であるが、人里も時としては山地と変わらぬという心情なら理解できる。風土記説話には正体を現わした神が三輪山などの山に籠る話があって、これは死者の霊が山に籠るという山中他界説の古い姿であるという(志田諱一、『風土記の世界』)。古代中国では、「群盜満山」、「平地の住民が山地へ逃げ匿れて匪賊化する」、「平地は住むべき場所、山地は住むべきではない場所であると可解される」ものであったという(大室幹雄、『桃源の夢想』)。これらは人にとっての山であって、勿論郭公にとってどうであったかを言うものではない。さて古の郭公にとっての山であるが、東光治の『万葉動物考』はこうした点に考察を進める上での優れた手本である。それに倣って月並だが、『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』に材を求めて、郭公の挙動を洗ってみよう。郭公はカツホトリ、カツボドリとも訓む。布穀鳥すなわちツツドリを指すとされたり、蚊母鳥すなわちカッコウドリのことだともされている。時鳥、雲公鳥というのがあがるが、これらは正真正銘の杜鵑の異名と看做すべきもので、ホトトギスとされる。『万葉集』には郭公は記載されていない。東光治によればホトトギスは最も多く詠まれた動物で153首は登場すると言う。確認しえた短歌113首のうちで山名が明記されているのは僅かだが、その中には「山」、「あしびきの山」、「二上の峰」、「五月の山」、「佐保の山」、「奈良思の丘」、「八重山」、「夏山」が名を連れねており、中でもあしびきの山が最も多く挙げられている。『古今和歌集』になると郭公が現われ、しかもホトトギスの16回に対して25回と凌ぐ。ホトトギスの山は「山」、「をとほ山」、「あしびきの山」、「さ月山」、「夏山」で山が最多となるのに対して、郭公の山は「山」、「あしびきの山」、「をとほ山」、「夏山」、「人待山」で山とあしびきの山とが最上位に並ぶ。『新古今和歌集』ではホトトギスは23回出現し、「山」を筆頭に、「五月山」、「神なび山」、「待かね山」、「かみ山」が記され、他方、郭公は21回で「み山」が最も多く、「山」、「外山」、「あしびきの山」も記録されている。かく眺むるに、郭公は『古今和歌集』の平安期の頃になって我が国に侵入し、ホトトギスが居た山々に棲みつき、あしびきの山ではホトトギスにとって代ったことは明白である。やがて機到れば、てっぺんかけたかななどと訳の判らぬ唄に現を抜かしているホトトギスの隙を衝いて目星をつけた山野に居座る。概とはかの権任日向守が「時は今天が下知る」と詠んだ五月である。

足曳の 山たちはなれ 郭公 おのが五月は 里なれりけり

『新葉和歌集』巻三に見える嘉喜門院の歌は、その辺りの様子を鮮明に伝えている。さて、あしびきとは足曳、足引、重引、葦引などと記す。かつまた、重引は葦刈に付随する所業で葦切があったことを示唆するものである。

重荷ると 堀江漕ぐなる 神の音 大宮人の 皆聞くまでに

よく葦刈の典故に引かれる歌で『万葉集』巻二十に出る謎人不知。大伴家持の長歌にも「葦刈

ると海人の小舟は入江漕ぐ櫓の音高し」（『万葉集』巻十七）というくだりがある。

夏刈の 葦のかりねも あはれなり 玉江の月の あげがたの空

藤原俊成の歌。『新古今和歌集』巻十に出る。これは似而非である。葦はまた葦とも書きヨシとも言う、というよりヨシと呼ばれることが多く、この植物の仲間の Phragmites という類はヨシ属と言われる。『重修本草綱目啓蒙』には葦として、ヒムログサ、タマエグサ、ナニハグサ、サマレグサ、ハマヲギ、アシ、ヨシの呼称が挙げられおり、兼は葦の一種形小なるもので、ヒメヨシ、ヨシモドキ、スダレヨシ、カナヨシ、ヒヨヒヨなどと呼ばれるとしている。日本にはヨシの他にツルヨシ、セイタカヨシの2種があるとするのが、正しい生物学の教えるところである。世界にも3種しかなく、世界中で見られるそうである。白亜紀中期に出現したこの類の一種はおそらくイネ科の最初のものであろうということである。イネ科というのは顕花植物の中では生態的に最も幅広く繁栄している巨大群で海中から高山に至るまで分布しており、最も分化し変化に富むラン科、キク科に次いで、擁する種は1万に達する。鳥類の全てよりも多い。生物学科などとは桁が違う。

吾が聞きし 耳によく似つ 葦の末の 足痛む吾が背 つとめたぶへし

『万葉集』巻二に出る石川郎女の歌。葦の末は葦若末とも葦若末とも記され、あしのうれ、あしかび、あしがび、あしなへと読まれている。あしかびとは葦芽で、葦角と同じく葦の若芽のことである。昔から若芽は食べ、根は下痢止、吐止の薬として用い、成長した茎は葦笠や葦簾に作った。摂州島上郡難殿村の葦を宜とす、という。桂川、宇治川、木津川が合して淀川となるところから少し下った辺り、東海道新幹線の車窓から淀川の風情を垣間見ることができるのは、その北の外れである。春になれば、北岸の浅い緑の竹林に覆われた山麓の山崎聖天観音寺の桜花が美しい。

きみなくて あしかりけりと 思うにも いとどなにはの 浦ぞすみうき

とは、『大和物語』に出る。谷崎潤一郎の『葦刈』の冒頭にも引かれている。その返しに詠う。

あしからじ とてこそ人の わかれけめ なにか難波の 浦は住うき

葦原は琵琶湖の風情でもあるが、なぜか古歌には描かれていない。「難波江の葦」、「難波湯短き葦」などとは続くが、「淡海海葦辺」などとは続かない。葦浦あるいは葦浦と名される地は南湖の東岸にあった。惟任日向守に弑された右大臣信長が築いた安土の城は北湖の東岸に広がった中之湖に囲まれるようにしてあったが、その中之湖も今は西ノ湖と永水路を残すのみである。春色安土八幡水郷と呼ばれるこの辺りはまた、葦を名産とする。最近の研究では葦は湖や沼の水の浄化に役立っているとされ、極めて重要有用な良い植物である。淀川でも十三近辺を筆頭にして浪速の葦の根は一面に塵芥汚物を捕捉しており、異観である。ただ、最近の研究によると、からんでくるヒルガオ、ヤブガラシ、カナムグラなどの葦植物には弱く、これに

抵抗するのはオギだという。だから辞書にも言う。「アシが悪しに通じるのを忌んで善しにちなんだ語」で、ヨシはアシの忌詞である。しかし、『倭訓栞』には「葦をよしともいふは、あしの反語也といへり」と紹介したあとで、「一説に、よしは葉もとに毛なし、根深く入もの也、あしは葉もとに毛ありて、根は土よりうへをはふもの也ともいへり」と公平に異説を示している。最近「人間は考えるヨシである」と言うそうだが、古い人間にはここはやはりアシと言う方が語感が良い。第一、アの子で始まるのが明るい。それに、『倭名類聚抄』に従えば元々の和名は阿之と記してアシと訓む。「あしははし也、はじめ也、草木のはじめ也」と『日本釈名』にも言う。アシはアシと素直に認めるべきものであって、ヨシなどと強弁すべきではないのである。どちらでも良いようだが、事はアシやヨシの一語に留まらない。曾て国体の唯一神性を大国民小国民の根に入らすべく動員された豊原中国瑞穂国という呼称はヨシとは読まない。これはアシでよい。吉原は元々は願原と書いたが、これがヨシでよいかどうかは問題が残る。芦原温泉は言い切るのを躊躇って言葉尻を濁している。頃は如月弥生になると、葦刈すなわち葦切からは足切を連想して数々の苦しい思いが湧き気分は良くない。尤も、やる以上は選抜試験が結果的に悪切たることを免れ得まい。恐ろしいことにこれは意外に素直に認められているところだ。しかしだからと言って、それを善切や良切と読み換えたら、評判が悪くなるだけでは済まされない思うべくもおどましい現世事となろう。哀れを止めるのはヨシキリである。結論を急ごう。賢明なる読者諸兄姉は既に正体を看破されたことであろう。葦引とは葦切を意味するものであり、あしびきの山とは割葦すなわちヨシキリの棲む山のことである。ヨシキリが山で暮らすなど戯けたことをと嘲る向きは、有学無知の誹を受けよう。鳥類図鑑に依ればコヨシキリ、オオヨシキリ共に葦原に生息する夏鳥としてある。しかし、吾人はヒトヨシキリが人里から遙か離れて山間に棲んでいるのを知っているし、山深き溪流の石根を越えて跳梁するその影を見た人を知っている。

たぎつ瀬に 一夜し白霧の 欄引けり 山上の木末の 上は静けし

海空耳の作、『海月集』に出る。白々明けの静まりかえった山の谷間、独り音を立てる早瀬の上を行くヒトヨシキリの姿である。すなわち、ヨシキリの在るところにカッコウは居るのであり、カッコウの現われるところにヨシキリは必ず見られるということなのである。更に言えば、ヨシキリ無くしてカッコウは在り得ず、ヨシキリ有ってこそカッコウはごごぞという時に声を発してその存在を主張し得る。

鶯の生卵の中に、鴛公鳥ひとり生まれて、汝が父に似ては鳴かず、  
汝が母に似ては鳴かず、卵の花のさきたる野辺よ、飛び翔り来鳴き響し、  
橘の花を居散らし、ひねもすに鳴けど聞き好し、遊物はせむ遠くな行きそ、  
わが鶯の花橘に、住み渡り鳴け

『万葉集』巻九、何人の先祖であろうか、詭人不知。古くから知られた托卵性、この類の性である。身から出た錆、すなわち、生息場所に象徴的に示された生活の依存性、本歌は、それが契りの斯かる声だと暗に断じているのである。声を単に音学的波動学的な音声として聞いているのではなく、生活の中で生きざまの発露であり露呈であると捉えようとしているのであり、そこに古代の素朴健全な生態学的な視点があると賞揚される。この解を恣意的だと詰るのは浅蕪であろう。解はこうではなからうかと考えるところから求めて到達できるものである。理学系の人達は好んでヒポテーゼとか作業仮説とか呼ぶが、同じことである。骨伝導によって自分の声は美しく聞こえるそうである。頭に手拭を載せて瀬波温泉に浸りながら、佐渡へ佐渡へと草木も靡くうーと米若節を唸る、あれである。中には骨伝導で自分の言っていることが判らなくなる御仁さえある。これこそがカッコウであり、だからカッコウなのである。偶の一鳴が命取りになる。ホトトギスとの行動における種差で、相通じつつ相異なる。自分の声がまんざらでもないが無邪気に誤解しているホトトギスの方は、人里人前で慥面もなく唄い囀る。

心なき 鳥にぞありける ほととぎす 物思ふ時に 鳴くべきものか  
中臣宅守の歌。『万葉集』巻十五に出る。結果は同じことである。

ほととぎす 無かる国にも ゆきてしか その鳴く声を 聞けばくるしも  
弓削皇子が詠む。『万葉集』巻八に見える。敗北的なまでの忿怒と呪詛。それを揉発する喧騒。浅羽鳥。

(10) 打日さす 宮にゆく子を 心愛しみ 留むはくるし やるはすべなし

『万葉集』巻4に出る大伴宿奈麻呂の歌。心配なのである。最近ABO式大学分類が導入されたが、この分類が鑑別の域を出るものでないことは実証済みである。AB型の貴方の運勢は当たるとも八卦当たらずも八卦である。名は体を顯わすというのを文字面どおり信じるからおかしくなる。でもやはりA型なのかB型なのか、お猿の小便きにかかるのだろう。実は破綻するのは分類に留らない。官すなわち官すなわち国立大学が斜陽だというのである。早晚民営化されるだろうと私かに公然と語られている。多分その過渡的段階として都道府県営になるだろう。東京大学なのに何故地方出身の学生が多いのか、和歌山大学なのに何故大阪府との境に移転するのか、といった純真素朴な疑問を解消するには、国立を廃止するしかない。そうすれば金沢大学は石川大学と改称して石川県の大学になる。金沢市営にするのなら金沢大学のままでいい。大阪府立大学・大阪市立大学と大阪大学といったような関係は適当に地元で解決する。間違ってもA系営、B国立といった大分割にしないことである。国鉄も分割民営化するのなら1線1社かせめて各都道府県1社にして、真に地元で密着した運営を計るべきであった。そもそも、都道府県や国は民営が正体なのだ。官営というのが仮体、財界による民営などとは偽体に外ならない。官民総出の教育改革、とどむはくるしやるはすべなしと案じる心である。

＜ 編 集 者 へ の 手 紙 ＞

◎ 前略。日本生物学会誌のバックナンバー 届きました。ありがとうございました。後日（といってもいつになるかわかりませんが）、〇〇〇支部長、〇〇事務局長の悪業をあばく（もうすでにあばかれてはいますが）原稿を書きます。というような話を2人にしたところ、“ワシラ、支部長、事務局長がワルモノなら、日本生物学会の会長はもっとえげつないでえー”と言っていました。＜そういう根も葉もないことを無責任に言い触らす奴こそ真の悪者である。脅迫に負けず、“真実”を明らかにしよう — 会長＞ ところで、私、当学会入会と同時に日本生物学会中国支部・組長に就任しましたのでお知らせします。＜いちばん強そうやな＞ 今後ともお見知りおきを。＜怖いね＞ 草々。

◎ 86年度と87年度の会費計200円をお送りします。

ところで、24号の＜編集者への手紙＞の中で会長が「最近に乗ってる車から見ても、100円会員の方が金持だもんね」などと言っていますが、これは私のことを指していると思われるのでくいえいえ決して左様なことはございません。金沢大学の学生にも、高級車を乗りまわし100万円のステレオを聞いている、君など足許にも及ばぬ金持が沢山いるものですから — 会長＞ 誤解のないようにここに真実を明らかにしておきたいと思えます。あれだけ読むとあたかも SOARER や  $\Sigma$  にでも乗っているかの如き印象を受けますが、私の車は単なる「世界の大衆車」COROLLA のセダンにすぎません。＜ここで、原チャリかチャリンコに乗ってる、と書けば、もう少し迫力があつたのにね＞ 会長の車が CORSA だったか TERCEL だったか忘れましたが、＜TERCEL だよ＞ 単に会長がひがんでいるだけのことです。＜ひがんでいることはたしかだが、それは君が COROLLA に乗ってるからではないよ。と言っても判らんやろうね＞ 9月も10月も給料がゼロで後期の授業料32万円が払えなくて困ってるくらいです。授業料が日本生物学会の会費ぐらい安ければ85万円×5年で SOARER でも買えたのですがね。＜君の頭の中には車しかつまってないのかね＞ 授業料を払わないと卒業させてくれないので、気前のいいおばにでも借りようと思っています。＜“気前のいいおば”に伝えたら、丁重にお断りする、とのことでした。悪しからず＞

それでは皆さん、血気にはやってグランドの砂を洗ったりしないで、からめてて御活躍ください。＜どちらかという、砂を洗う方じゃなくて、洗われているらしいよ＞

＜日本生物学会の会員にもいろんな人がいて、会長も相当苦労していることがおわかりでしょう＞

<< 編集局だより >>

3局長：やあ、会長、久しぶりですね。お元気ですか。

会 長：長いこと顔も見せておいで、お元気でなかないやろ。糸の切れたタコみたいに、どこをうろつきまわっていたんや。

3局長：別にどこもうろついてませんよ。ずっと毎日、学校へ来てましたよ。

会 長：そんなら、何でこの部屋へ顔出さんのや。

3局長：この部屋へも毎日はいってるんですけどね。いつも会長がいないんですよ。会長は5時ごろになったら「ヨメさん、迎えにいかんならん」いうて帰るでしょう。僕が出勤するのはそのあとですから。

会 長：何や、夜だけ来てるんか。昔、5時になったら研究室のカギ、みんな閉めて、学生が文句言うたら、「ここは夜間大学ではありません」いうた先生がいたけど、この部屋もカギ閉めなあかんなあ。

3局長：そういうと、初めて気がつきましてけど、この部屋、カギかかったこと一度もないですね。夜来る学生のためを思って、カギかけないんですか。

会 長：そうやそうや、と言いたいとこやが、ほんまはな、これほどこだけの話やけど、カギがないんや。

3局長：どうせ会長のことだから、カギ失なっただけでしょう。

会 長：いや、そうやない。かつて学生が運動して、教室の中がもめとった時に、どこかへ行ってもたんや。さがすのも面倒やし、教室会議の解散で管理運営の権限ははくだつされてカギさがす義務もなくなったしな。

3局長：教室会議の解散いうたら、もう10年以上前のことでしょう。10何年も開けっ放してきたんですか。

会 長：正確にいうと15年前や。それ以来かけだことない。ないもんがけられんわな。

3局長：そんなことでええんですかねえ。もっとも、あんまりこんなこと言って、カギかけられたら、こっちが困るけど。

会 長：2～3年前に、理学部にドロボーがはいってなあ。

3局長：ホントですか。まあこれだけ開け放しといたらはいりやすいでしょうけど。

会 長：その時宿直してた人も全然気がつかないらしい。これが下っ端の職員やったら、それこそ大目玉を食うとこやろ。それで、組合で守らなあかんいうて調べてみたら、何と庶務係長が宿直しとったんや。怒る当人やからカッコつかんわな。

3局長：当人どんな願っていました？ 会長のことやから、またなんか皮肉の1つでも言ったんでしょう。

会 長：皮肉なんてもんやないよ。さんざんからこうで、今でも時々話題にする。

3局長：（こんな人かなわんなあ、庶務係長に同情するわ）

会 長：何か言うたか？

3局長：いえ、別に。ところで、何の話でしたっけ？

会 長：若いくせに物憶えの悪い奴やな。この部屋にカギをかけん、いう話や。

3局長：そうそう、ドロボーがはいって、何がとられたいうことでしたね。

会 長：それが何にもとられなんだのやから、面白いやろ。ドロボーは、わざわざカギのかかった部屋をいくつも、ガラスを割ってはいりこんだんや。この部屋にははいっとらん。

3局長：開けて中見たとたん、こらはいっても何にもないと思ったんじゃないですか。

会 長：まあ、それもあるな。大体盗られるようなものおいとくから、ドロボーが成立するんや。盗られる奴にも責任がある。

3局長：“盗人にも3分の理”ということですね。

会 長：そやそや、ええこと知ってるな。そしたら、ドロボーの起原というの、知ってるか。

3局長：知りませんよ、そんなこと。

会 長：生物学者たるものは、何事によらず、起原の問題に興味を持たなあかんのや。

3局長：僕は生物学者じゃないもーん。

会 長：そうや、君はショーユ屋になるんやったな。それでもやっぱりショウユの起原くらい調べてみないかん。

3局長：そのうち調べて報告しますよ。（それでも言わとかんと、どこまでも追及される）

会 長：何か言うたか？

3局長：いや別に。それで、ドロボーの起原はどうになりました？

会 長：そやそや、あんな、盗られるもんがあるから盗る奴がおるんやろ。盗られるもんがなかったら、だれもドロボーにはならん。いやなれんはずや。

3局長：そういっても、だれでも1つや2つは盗られるもの持ってますよ。会長にくらべたら少ないけど、僕でも、テレビやらステレオやら、サイフまでありますよ。なが身はほとんどないですけどね。

会 長：今はもちろん、皆んななんか持っとるよ。そやけど、サルから人間になって間なしのころは、何ももってなかったはずや。

3局長：そういえばそうですね。

会 長：そこへ悪賢い奴があらわれて、他人の労働の成果を横取りしよった。

3局長：会長と僕とだったら、まちがいなしに悪賢いのは会長ですね。

会 長：そんなことあるか。昔の君ならともかく、そとどう悪なりよったからな。

3局長：それで、その悪賢いのがドロボーの始まりですか？

会 長：と思うやろ。それがそうやないんや。ドロボーというのは皆善人で、悪いのはドロボーな  
んかにはならん。

3局長：何か、僕がドロボーになるみたいですね。

会 長：まあ、オレよりは素質があるな。そこで、その悪賢い奴が考えた。横取りしたもんを守  
らんならん。人のもん盗ったらドロボーやいうことにしよう。これがドロボーの起原や。

3局長：いつものことですけど、会長のは一応の筋は通ってるけど、どこかおかしいんですよ。

(そこへ、3局長の友人の会員がはいてくる)

平会員：会長。この3局長はね、就職決まったからいうて、遊びまわってるんですよ。今度はオ  
ーストラリアまで行くんだって。怪しからんでしょう。

会 長：そら怪しからんなあ。君らが教授から見はなされて、大学院2回も落されてから、われ  
われ非教授有志がいかにか心配しいかに気を使ってきたか。そのわれわれですら行ったこと  
のないとこへ、君は行く気か？

3局長：行く気ですよ。どこへ行ったってええじゃないですか。

会 長：全く反省の色はないな。おい、平会員、君は機械いじりが得意やったな。

平会員：こないだ、会長の家へ行って、違法のビデオテープのダビング、したてしょう。

会長：そんなこと、大きい声でいうな。あのな、空港のレントゲン検査にひっかからん時限爆弾  
1つつくれや。

平会員：爆弾はプラスチック爆弾にしたらかかりませんが、時限装置には金属がどうしても要  
りますから、ちょっと難しいですね。

3局長：その時限爆弾、何に使うんですか？ まさか僕の荷物に入れようというのじゃないでし  
ょうね。

会 長：その、まさか、や。

3局長：僕なんか殺したって、何にも得しませんよ。

平会員：損得の問題やない。単に1人だけええことするのが許せん、いうことや。

3局長：そんなことで殺されたらかなわんなあ。

会 長：いや、得することもあるで。遺族になりすましたら、オーストラリアまで、タダで旅行  
できるやないか。

平会員：そりゃいいですね。カッコだけ花束くらい投げといて、あとはダレート・バリヤー・リ

フで潜りますか。でも、そうすると、オーストラリアの近くで爆発ささんならんですね。

会 長：それそうや。東京湾で落ちたんじゃあ、せいぜい上野動物園のパンダくらいしか見れんからなあ。時限装置の時間、うまいこと計算しとかんと。

平会員：それはまかして下さい。パッチリやります。グレート・バリアー・リーフのどの辺がいいんですか？

3局長：まあ、ええけどなあ。せめて、行きやなしに、帰りにしてくれよな。

平会員：それは無理や。何日行くか知らんけど、1週間以上の時限装置は難しいで。あっ、そうや、うまい方法がありますよ。

3局長：お前のうまい方法は、そっとするもんばかりやからなあ。

平会員：こいつが一緒に行くわけでしょう。

3局長：当り前やないか、僕がそもそも行くんやもの。

平会員：そやから、爆弾だけつけて、この男に押さしたらいいんです。

会 長：そりゃいい考えや。絶対間違いない。レントゲンにもかからんしな。

平会員：いいでしょう。早速つくりにかかりますか。

3局長：……ボクがボタン押すの？　ボクはどうなるのだ！

(以上の会話はすべてフィクションであり、実在の人物、団体等に、何の関わりもありません。)

## < 編 集 後 記 >

前号でお知らせした通り、第2編集局長の転出に伴って第3編集局を急換創設することとなりました。が、できたものの、学会誌が発行されなかったため、登場の出番もなく、<君が“登場”しなかったから、学会誌が出なかったのやないか。他人事みたいに言うな — 会長> とうとう今年度も残すところあとわずかとなってしまったのです。これが最初で最期<後だよ>かもしれないので、とりあえず、今回だけよろしくお願いします。<無事卒業できるかどうかかわからんぞ。ウッシッシ>

しかし、一体何をお願いしたらよいのだろうかと思ってしまうのであります。3局長になっただからというもの、と言っても何時だったのか全然記憶にないのだけれど、会長から、「原稿を集めるか、さもなくば、自分で書け」と、罫を合わせる度に言われていたのです。ところが、こういうのはくり返して言われるうちに、単なる「あいざつ」のようなものに違いない、との私的

見解に達し、＜勝手に達するな＞ 又、会長及び3局長（私です）共に多忙であったため、＜君とオレとが共に“多忙”だなんていうでも、だれも信用しないよ＞ このような年の瀬もおしつまった時に、お呼びがかかった次第なのです。ちなみに、何に忙しかったかは、本当に忙しかった人たちに気の毒だから、書かないでおくことにします。＜“私”を入れろよ。会長もそうかと思われるではないか＞

突然、思い出したけれど、会長が本を出しました。お金と時間に余裕のある人は書評を送って下さい。＜前から無責任な奴やと思ってたが、ほんまに無責任な奴やな、書名も出版社も書かずに、おいて、書評が書けると思うか。編集局長には惜しいから、会長にしたるか＞ 学会本部周辺の人達はどうも読んでないようなので、地方会員の方に期待しています。私は脚注とあと書きしか読んでいないので、本文については何も知りません。だから、何を書いてこようか、ちゃんと読んだかどうかは会長にしかわからないのではないかと思います。＜読まんと書評を書いてもかまわんということか？ そんなら君でも書けるやないか＞ もう少し待っても、だれも書かなかったら、会長に書評を書いてもらおうと考えてます。＜歯の浮くような書評、書いたらか＞  
＜ここで、この問題に関する真相をバクロしておこう。本が出たとき、3局長（および他の2名）に、ちゃんと読んで書評を書く、という約束で、署名本を呈した。本だけもらって彼らは、読みもせず、書評も書かない。顔を見る度約束の履行を要求したら、ほとんど来なくなってしまった。3人とも、大学院（他大学）や就職が決まっているのだが、書くまでは卒業ささない、現在脅迫中なのである＞

ところで、今回は一体どんな原稿が集まっているのだろうか？ 編集はしない方針なので—— 少なくとも、何かせねばならないという方針はなかったと思う —— どんなのが寄稿されているのか知らなかったのです。は、は、は。大体、編集もしないのに編集後記とは何じゃい、と思うのであるが、そういう通例になっているようなので、体制順応型の私としては＜体制から見放されてるくせに＞ 素直に従ってしまうのです。実際のところは、気の利いた＜効いた、じゃないの？＞文を書けないから、仕方ないという気もするけど。＜気の効いた文を書けなかったら編集局長になれるのかね？＞

未完の大作などといううわさもあったけれど、＜彼は、書く前から未完になるということがわかっている大作を今書いている、と自称していた。だれも信用してなかったけど＞ 未完のみならずついに原稿ごと行方不明になってしまい、まほろしの未完の大作という、もうほんとうにあったのかどうかもわからないようなシロモノになってしまったらしい。＜ほんまは、初めからなかったんやろ — 会長。そんなことないですよ、ちゃんと書いた、いや、書きかけたんですよ — 3局長＞

そのかわり、優秀なる、数少ない第3局の編集員が、投稿している or するらしいので期待して下さい。（これも内容については一切、関知していない。）＜この間持ってきて、ちらちらと見ただけで、また持って帰ってしまったよ＞

と、ここまで書いて中断していたら、再び、早く書けとの御命令。ついでに3局長の権限で（あるとすればの話だが）、他の原稿を見せてもらった。＜見せて“もらう”のに“権限”は要らないよ＞ すると、すでに編集後記ができていないか。＜“編集局だより”と“編集後記”をごっちゃにしてはいけない＞ おまけに、そこで会長と3局長の会話がなされている。私もどうやら年老いたらしい。身に覚えのない会話と書いた記憶のない編集後記が、何よりもそれを物語っている。それじゃあ、この文章の題は一体何にしたらいいのだ。仕方ないので、途中ではあるが、改題してしまおう。

### << 3 局 長 の ご あ い さ つ >>

平凡ではあるけれども、他に思いつかないからこれで良しとしてしまおう。ちなみに私はすぐ自己満足してしまう性分である。

話はまたもぶっ飛んでしまう。いかに先の事を考えていないかが良くわかる、などと陰口をたく人がいるかもしれないが、＜そんな人いないだろ。え、“先”だけじゃなく、現在も過去も考えていないと“表口”をたく人ならいそうだけど＞ そんなことを気にしては、ここではやっていけない。

うわさによれば、早くも第4編集局を作る動きがあるらしい。3局が何もしないせいかどうかは知らないけど、数か月のうちに3局全員を地方へ飛ばしてしまう魂胆のようだ。＜斎藤先生に頼んで、3局全員金沢にとどめてやろうか＞ 当学会は、会長独裁であるから、すべて会長が決める。＝すべての雑用も会長がやる、ことになっているので、逆らっても仕方がない。というより、会長が、だれか逆らうのを待っているようなので、多分逆らうととんでもない事になってしまうと思うのだ。＜そんな事ないよ。ために一度逆らってみたら＞

というわけで、会員の皆様、短い間でしたが、どうも有難うございました。＜お礼というのは、だれかに何かしてもらった時に言うことになっている。君は“会員の皆様”から、ワイロでももろたんとかうか？＞ 以後は第4局長をよろしくお願いします。＜卒業したからといってお役御免になったと思うのは甘いで。1局長も2局長もいまだに使われてる。君もこれから度々登場してもらわんならん＞

### << お ま け >> 3局長と会長の会話 真相版

3局長：どうも、こんにちわ。

会 長：なんや君か。ここんとこ顔見んかったけど、どこ行ってたんや。

3局長：別にどこへも行ってませんよ。会長が学校へ来てないか、来ても早く帰ってしまうんと

ちがいますか。

会 長：そんな事、あるわけないやないか。大体、ずっとわしの行動を見てたわけやないのに、ええかげんなこと言うな。

3局長：そう言えば、どこぞに他人の給料まで調べ上げてるような人がいましたね。

会 長：そやそや、権限もないのにようやるわ。

3局長：僕だって、公務員の給料日とボーナスの日だけは忘れませんが、金額までは知りませんよ。

会 長：そうやって人の後にばかりついて、好きあらばおごってもらうような奴のことを、寄生虫と言うのや。

3局長：その話、どっかで聞いたような……

会 長：まあ、そんなこともあるやろ。

3局長：だけど、寄生して生きてくというのも、大変なんです。宿主のとぼっちりをもろに受けますからね。

会 長：君の場合は、ついてる宿主の選択を誤ったんや。何の因果かはよう知らんが。

3局長：僕にも判りません。

会 長：そりゃ考えてないだけや。

<会長・注：“真相版”などとかまえているが、内容は一向に変わりばえしないではないか。要するに、ヒマ人のヒマつぶしの会話であって、中身のないところまで同じである。中身がないといえば、“編集後記”も“ごあいさつ”も、全く内容がない。内容のないことをかくの如くえんえんと長く書くのも、一種の才能と言えんことはない。今後もこの調子で人生を送ってくれ給え。どうなるかは責任持たないが。>

◎◎会長と、日本生物学会が面白いことを知りながら同時に危険でもあることを察知して入会をずっとためらっている、非会員との会話◎◎

非会員：そろそろコーヒーがはいっているころだと思って……

会 長：なかなか感がええな。いま入れたとこや。

非会員：いえ、感じじゃないんです。隣の部屋にいたら、音が聞えて。

会 長：それでは知能犯やないか。まあええから、すわって飲め。

非会員：ええ、そのつもりです。ところで、先生のヒキガエルの論文、いつまで続くんですか？

会 長：ちょうど、第14報のレフエリーが帰ってきたとこや。見るか。

非会員：ええ、見せて下さい。えーと、「p. 3の前半は、やや人間の主観・擬人的印象が強く残ります。そこで以下のように2ヶ所訂正してみました、いかがでしょうか。……p. 3、9行目“思えば”→“すれば”」。これは、本文読んでみないと判りませんね。

会長：そうや。本文読んで、レフエリーの指摘が正しいかどうか、君の判断が聞きたいね。

非会員：（本文を読む）「……調査を終えての印象を一言で述べれば、ニホンヒキガエルはきわめて個人主義的で、かつ大変怠惰な生き物であった、ということである。生物界は常に激しい競争の中にあり、その中で勝ち抜き、自己のDNAを残そうと思えば深遠な“戦略”を必要とする、というのが最近の生態学における主流的な考え方であるらしいが、ニホンヒキガエルの生活をながめていると、何もそうまでしなくとも生き残る道がありそうに思える。」……ふうん……。

会長：判断つかんか。

非会員：難しい所ですねえ。この位だったら目に角立てることもないとも思いますし、とってレフエリーの言うことももっともですし……。それで、先生、どうするんですか？

会長：これが返事や。（1枚の紙を示す）

非会員：「p. 3 9行目：“戦略”といえは、“思わ”なければ立てられないのではないのでしょうか。戦略という“擬人的”用法には私も反対です。」そういえば、ヒキガエルの前の論文に、「戦略などといわずに方法でよいではないか。目的論的な意味を含ませたいのなら方策という言葉もある。タヌキとキツネに限って策略という言葉も面白い。」などと書いてましたね。あれにはレフエリーは何か言ってきたのですか？

会長：何も言ってこないよ。まあ、同じ人じゃないのだろうがね。要するに、社会生物学なるものが出てきて、すべての生物の行動は、利己的な遺伝子が自分のコピーをできるだけ沢山残すために立てた“戦略”にしたがってる、ということになってしまった。全部擬人主義やな。

非会員：でも、いくら何でも遺伝子が戦略を立てるなんて、だれも本気にしないから、たとえ話であることが明白で、擬人主義にはならない、と、ドーキンスが書いてますよ。

会長：それがたとえ話の怖いところや。“ダールベルグの遺伝子”いうの、知ってるか？

非会員：何ですか？それ。

会長：ダールベルグちゅうのは、偉い人類遺伝学者でなあ。その人がステータス向上遺伝子なるものを見つけた。社会的地位を向上させるように働く遺伝子や。君、持っていそうやな。

非会員：そんな遺伝子、ほんまにあるんですか。

会長：あるらしいで。ウィルソンの「社会生物学」の中に出てくる。10世代もせんうちに、この遺伝子の所有者は社会の上層部に増えていくだろう、と書いてある。

非会員：そこまでいくと、ちょっと信じられませんかえ。

会 長：ところがなあ。この遺伝子は、ダールベルグの教科書の、ある章の最後についてる練習問題の中に出てるらしいよ。遺伝子がどのように広まっていくかの計算問題として、ダールベルグが冗談でつくった遺伝子やったというわけや。

非会員：それをウイルソンが本当と思って、とりあげたんですか。

会 長：ウイルソンが本当に本当やと思うたかどうかはわからんが、読む人にはいかにも本当にそんな遺伝子があるように思わせるように書いてるな。

非会員：いかにも本当みたいに書くのは、先生も上手ですけどね。

会 長：そういうたら、この間、先生の言うことは100%冗談やと思うて聞いてます、いうた学生がおったなあ。なんほ何でも、100%はひどいて。

非会員：100%いうことはないですよ。まあ、95%くらいですね。

会 長：そうや、そうや。……いや、ちょっと待て。95%いうたら大方やないか。そんなことないわい。

非会員：まあ、ええやないですか。それで、ダールベルグの遺伝子は、どうなったんですか？

会 長：別にどうもならん。あることになってるのやろ。まあ、これだけの階級社会で競争社会やから、社会的地位向上の“意志”は、それこそ99%の人が持ってるやろな。ただし、それが遺伝子によるものかどうかはわからん。

非会員：のこり1%くらいは、持ってないんですか。

会 長：たまにはそんな奴もいるやないか。

非会員：社会的地位下落遺伝子を持つるような人もいますね。「日本生物学会」なんかこそえてね。

会 長：学会会長いうたら、学者としての最高の地位や。向上したくてもこれ以上向上でけへん。そやから、決して向上心がなくなったのではない。むしろ、うちの会員どもは、下落遺伝子を持つてるかも知れんなあ。

非会員：何ですか？

会 長：これまでだれ1人、会長のポストをねらった奴はおらん。向上心のない奴ばかりや。

非会員：……？

## 「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこばまない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

## < 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、どうしても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を巻留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

## 日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはいらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ

記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

日本生物学会誌 第25号 1988年1月15日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載